

3 活動報告（Ⅱ 研究）

地域志向型教育研究

学内公募を行い平成２８年度１０課題、平成２９年度１１課題、平成３０年度３課題を「地域志向型教育研究」として採択し、社会貢献活動及びその教育プログラム化に資する知見の蓄積を行っています。

地域志向型教育研究採択研究課題一覧

平成28年度

番号	研究代表者		研究課題名
	所属	氏名	
1	文学部	フェネリー マーク	自然との共有体験をベースとしたワークキャンプによる地域貢献型人材キャリア形成プロジェクト
2	生活科学部	中岡 泰子	大学生と地域住民の協働による教育プログラムの実践
3	生活科学部	田村 典子	初年次教育としての多人数による地域教育の有効性に関する研究
4	生活科学部	細谷 洋子	世界の民俗スポーツを体験しよう！―地域貢献プロジェクトの企画運営を通じた人材育成―
5	看護学部	武田 道子	課題探求ゼミナールの地域教育的要素の導入による学習効果向上プロジェクト
6	看護学部	藤代 知美	精神障がい者との協働による課題解決教育プログラムの開発
7	全学共通教育センター	佐々木 義登	全学共通教育科目での地域教育的要素の導入による学習効果の向上に関する試行
8	文学部	太田 剛	学生の書道の力を地域活性化に活用する研究
9	看護学部	橋本 茂	徳島県の過疎地域における次世代の医療・福祉を担う人材育成―看護学部生によるキッズナースの育成―
10	文学部	須藤 茂樹	寺院文化財調査研究スタッフ育成プログラムの開発

平成29年度

番号	研究代表者		研究課題名
	所属	氏名	
1	文学部	フェネリー マーク	人とサルと自然との共生体験学習を通じた地域貢献型人材キャリア形成プログラムの構築
2	生活科学部	田村 典子	初年次教育としての多人数による地域教育の有効性に関する研究
3	生活科学部	兼間 和美	「子育て支援の専門性」を育てる授業内容の研究
4	生活科学部	細谷 洋子	世界の民族スポーツ・あそび探検隊！―出前ワークショップの企画運営を通じた人材育成―
5	看護学部	高橋 順子	徳島の近代産婆の活動分析によるあらたな開業助産師モデル開発と教育内容への反映
6	看護学部	武田 道子	課題探求ゼミナールにおける地域貢献力向上のための教育的支援方法開発プロジェクト
7	看護学部	佐藤 千津代	大学の学習環境を活用した訪問看護技術研修の実践と評価
8	看護学部	永吉 円	プレコンセプションケア IN 徳島 〜これから妊娠を考える人たちへ〜
9	看護学部	久保 幸子	防災意識の高い看護学生を育成するための検討
10	文学部	太田 剛	学生の書道の力を地域活性化に活用する研究
11	看護学部	橋本 茂	過疎地域における次世代の医療・福祉を担う人材育成―看護学部生によるキッズナースの育成とその効果―
12	文学部	須藤 茂樹	寺院文化財調査研究スタッフの調査技能の定着に関する試行

平成30年度

番号	研究代表者		研究課題名
	所属	氏名	
1	看護学部	高橋 順子	地域の母子統合ケアを目指す助産師活動「阿波コウトリ塾」
2	看護学部	高田 律美	更年期女性の地域におけるヘルスケアの改善プログラムの実施
3	看護学部	小川 佳代	地域における次世代の医療を担う人材育成 －看護学部生によるキッズナース事業への参画の効果－

※ 平成27年度実施の研究課題「徳島の食文化に関する研究―次世代に伝え継ぐ徳島の家庭料理―」「寺院文化財調査研究スタッフ育成プログラムの開発」については活動の中心が平成28年に実施されたため、本報告書に掲載する。

活動テーマ

人とサル共生プロジェクト

自然との共生体験をベースとしたワークキャンプによる地域貢献型人材キャリア形成プロジェクト

活動の概要

サルの冬場の餌とならないよう過疎高齢化しているゆず村(木頭北川村)を応援し、そこで暮らす人々から生活と文化と自然との交流を体感し、人とサルと自然との共生体験学習を通して、一人ひとりの自らのキャリアについて考えるワークキャンプ。

代表者名 : フェネリー マーク (文学部, 国際文化学科, 准教授)

活動メンバー : 四国大学学生キャリア形成実践受講生・学生ボランティア

連携先名 : 那賀町役場木頭支所 木頭ゆずクラスター協議会 那賀町地域おこし協力隊

実施場所 : 那賀町奥木頭「北川」

活動期間／スケジュール

平成 28 年 9 月 8 日 ~ 28 年 9 月 9 日 事前調査

平成 28 年 10 月 29 日 打合せ【市内】

平成 28 年 12 月 2 日 ~ 28 年 12 月 4 日

実施した活動内容



2016年12月2日(金)~4日(日)「人とサル共生プロジェクト~木頭ゆずちぎり隊~」を「地(知)の拠点事業」として実施いたしました。(主催:四国大学学生ボランティア活動支援室・木頭ゆずクラスター協議会・那賀町地域おこし協力隊)。参加者は、本学の「キャリア形成実践科目」受講生と「学内募集」学生とで計22名でありました。

この活動は、旧木頭村北川地区のサルのえさ場となっている急斜面のゆず畑で、完全にゆずを収穫し、また、ゆず古木を伐採するという企画でした。今回で3年目を迎え、1年目ごとに整備してきたゆず畑で完璧に伐採し、サルが里山に降りてこない環境づくりができ、地元住民から大変感謝されました。作業は大変厳しい活動でありましたが、ゆずちぎりが困難な急斜面を学生たちは果敢に攻め、2日間で1トン(金額にして約10万円)の収穫がありました。出荷した代金は、ゆず畑をサルから保護する活動に今後も活用されます。

学生のリポート

12/2(金)～12/4(日)の3日間、那賀町木頭にて活動回数3回目となる「人とサル共生プロジェクト～木頭ゆずちぎりたい(隊)～」に行きまして参りました。

この活動は過疎高齢地域のゆず農家支援、そして鳥獣被害対策という目的で行われています。

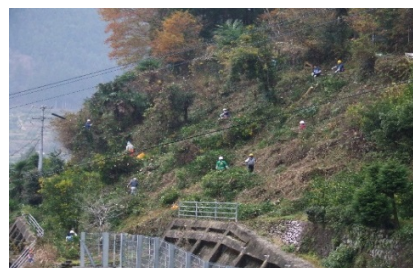
1日目は獣害研修会、翌日の班分けを行い、2日目はご指導を受けつつ現場での柚子採り、3日目は収穫した柚子の計量、掃除、反省を行いました。

木頭の人々は毎年冬になると、収穫後の取り残された柚子を狙って山から村に下りてくる鹿や猿により食い荒らされる作物の被害に頭を悩ませていました。野生動物が増える条件である「エサ」=放棄、取り残しゆずを減らすことで、「人とサルの共生」を目指して3日間地元の方々に指導を受けながら柚子採りに奮闘しました。

活動は天候にも恵まれ、急斜面でのゆずちぎり・木の伐採や、比較的平坦な場所での柚子採りを、各チームに分かれて行いました。

不安定な足元や急な斜面にも臆することなく、課題達成に向けて元気に取り組み、3日間の活動を終えると皆達成感に満ちていました。また怪我がなく活動ができたのも何よりでした。

3日間という短期間でしたが、郷土料理を食べ地元の方々とふれあいを通して、また収穫体験を通して学生たちは「人とサル」との「共生」について考え、次の活動への課題を発見し、またチームワークの大切さを学ぶことが出来ました。今年も昨年の反省と課題を生かし活動したいと思います。



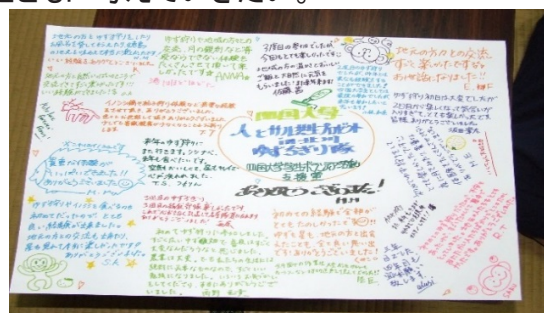
活動後のリフレクションの様子

活動成果

- 以下のような点で変化がみられた。
- 支援室の学生たちの活動(学生のコーディネート力、提案力、企画力、調整力、実践力、発見力、住民とのコミュニケーション力・支援力)
- キャリア形成・活動を通して学生が自分の生き方・進むべき道を考えるきっかけ。
- 地域住民および地域おこし協力隊の方々との交流を通して、学生が将来の生き方を考えるきっかけ。
- 高齢化により実施できていないゆずの収穫
- 学生との交流を通して、高齢者の活性化
- サルのえさとなるゆずの減少にともなうサルの減少そして他の農産物への被害も減りました。

課題及び今後の展望

- 木頭における活動報告の充実・まだ十分に地元の方々に活動の理念・成果を報告できていない。那賀町地域おこし協力隊の情報誌などを通して報告の検討をしている。
- 他の場所でのニーズが明確となり、今後活動場所の変更を検討している。
- 今後はもっと徳島の活性化について学生とともに考えていきたい。



活動テーマ

大学生と地域住民の協働による教育プログラムの実践

活動の概要

本研究で実施した教育プログラムは、大学生が地域に暮らす人々との交流を通じて、地域の課題を発見し、分析し、解決のための方策の提案、実践までを行う地域問題解決型プログラムである。本教育プログラムの実践を通じて、地域で活躍できる人材育成を目指すとともに、地域活性化の一助となるような活動を実践することを目的とした。

代表者名：中岡 泰子(生活科学部, 生活科学科, 教授)

活動メンバー：有内 則子(生活科学部, 生活科学科, 准教授)

上野 昇(生活科学部, 生活科学科, 講師)

連携先名：ふれあいの里さかもと

実施場所：徳島県勝浦郡勝浦町



活動期間／スケジュール

活動期間は平成28年4月～平成29年2月で、以下のスケジュールに延べ30名の学生が参加した。

1. 地域を知る	平成28年4月14日(木) ●勝浦町地域おこし協力隊員 大友和紀氏による講義 「徳島の中山間地で働く理由と、その魅力」 4月21日(木) ●勝浦町坂本地区の訪問
2. 地域をデザインする	4月28日(木) ●講義「デザイン的な思考を持つ」 5月12日(木) ●講義「地域とデザインを実践する」 5月26日(木) ●勝浦町の先進苺農家の取材 6月2日(木) ●苺農家案内パンフレットの企画提案の作成 6月9日(木) ●苺農家案内パンフレットのプレゼンテーション
3. 地域の伝統技術を伝承する	9月25日(日) ●竹かご作り体験(第1回) 9月26日(月)
4. 地域活動に参加する	9月29日(木) ●「あかりの里さかもと」あんどん制作 10月6日(木) 10月13日(木) ●あんどんの設置・坂本八幡神社の秋祭りの参加
5. 地域の魅力を発信する	平成29年1月21日(土) ●「坂本おひな街道」展示用竹かご作り体験(第2回) 2月17日(金) ●「坂本おひな街道」展示 2月26日(日) ●イベント「阿波勝浦満喫フォトオリエンテーリング」での案内・インタビュー調査の実施

実施した活動内容

高齢化・過疎化が進行し、人口減少問題や地域の活性化への取り組みが急務となっている徳島県勝浦町坂本地区をフィールドに、学生が現地を訪れ、地域住民の協力のもと上記の活動を実施した。

坂本地区の見学からスタートし、地元農家の取材とパンフレット制作、地元の竹細工職人から学ぶ竹かご作り体験、地元のお祭りの参加とイベントのPR活動を行った。



苺農家「マルチ園」の見学、取材(5月26日)



学生が提案した苺農家「マルチ園」パンフレット(6月9日)



坂本家の見学(4月21日)



イベント「坂本おひな街道」への参加(2月26日)

学生のレポート

竹かご作り体験に参加した学生のレポート（一部抜粋）

竹細工職人の海川さんのご指導の下、竹かご作りを3日間にわたり体験しました。竹かご作りは主に、底編み→立ち上げ→胴編み→縁作りの4つからなる工程になっています。実際に竹かごを制作すると、思っていた以上に大変な作業の連続でした。初心者の私には一個の竹かごを作るのは困難で時間も大変かかりました。制作途中で失敗することもありましたが、海川さんや竹かご作りに参加していた友人の手助けもあって作り上げることが出来て大変良かったです。また、初心者ではすぐには習得できない職人技を間近で見られたことも貴重な体験となりました。



坂本八幡神社「さかもと あかりの里」あんどん制作参加の学生のレポート（一部抜粋）

あんどん作りは、まず、各自が考えたイラストを見せ合うところから始まりました。その中から2作品が選ばれ、2チームに分かれて作業を行いました。今回参加する勝浦町坂本地区は勝浦みかん発祥の地であることから、両チームともみかんの木が描かれました。さらに、Aチームはお月見をしているウサギ、Bチームは自然を楽しんでる男女が描かれました。イラストを貼り付け、LEDライトで照らした時の感動と達成感は忘れられません。あんどんはとても綺麗で、お祭りの場所にとってもマッチしていました。貴重な体験ができて良かったと思います。



学外協力者レポート

勝浦町坂本地区では、2月下旬から3月にかけて「おひな様の奥座敷と坂本おひな街道」が開催され、風情ある旧街道筋には趣向をこらした多くのお雛様が飾られ、毎年多くの観光客で賑わっている。地元住民が大切にしている本イベントに学生も参加し、地域の魅力を発信するお手伝いをした。学生が制作した「竹かご」を一緒に展示するというアイデアは、地元の自然素材から生まれた美しい伝統の手技をPRすることができ、観光客から好評を得ることができた。また、1.8m四方の顔出し看板は、特に、子ども達に評判だったようで、イベントに賑わいをもたらしたと住民の方々が喜んで下さった。



学生が制作した竹かごとおひな様の展示



学生が制作した「坂本おひな街道」顔出し看板

活動成果

学生は、今回のフィールドワークの地域をどうすればもっと活性化することができるのか、また、この地域で残したい生活文化や生活技術、精神文化といった価値をどう後世に受け継いでいけばよいのかなど、学生なりに解決策を一生懸命に考え、仲間と協力して実践した。



学生が制作した竹かごと巨大あんどん

本活動を通じて、学生自身が自分たちの活動が少しでも地域の活性化に貢献することができたという実感と、住民の方々から頂いた評価により自信を得ることができたことは、大きな成果であった。

課題及び今後の展望

本活動は、平成28年度から新設された生活科学科の専門科目「コミュニケーションデザイン」及び「フィールド研究」の中で実施した。これらの科目は、地域貢献型人材の育成を目的とした地域教育科目として位置付けている科目である。



チームでアイデアを出し合っている様子

今後は、より効果的な成果をあげることできるよう、教育効果の測定を実施し、授業内容の改善に反映していきたい。

そのためには、継続的な活動を実施していく必要があり、地元との連携を強化し、学生が活動できる地域をさらに広げていくことが課題である。

活動テーマ

初年次教育としての多人数による地域教育の有効性に関する研究

活動の概要

共通教養科目「健康スポーツ」での「癒しの道を歩く健康体験学習」集中実技は、平成20年度より実施され、地域教育的要素を持った児童学科学生の初年次教育のイベントとして定着している。近年、学生数の増加により実施体制の見直しを図る必要が生じており、そのために、大人数での実施に対して補助的な立場として3年生を参加させてプログラムを試行し、運営面での課題の洗い出しと従前の学習成果との比較による教育効果を検証した

代表者名： 田村典子(生活科学部児童学科教授)

共同研究者： 范永輝(生活科学部 児童学科 講師) 細谷洋子(生活科学部 児童学科 講師)

実施場所： 事前指導・事後指導：R101と体育館、

本番：四国八十八か所 第一番札所霊山寺から第六番札所安楽寺

活動期間／スケジュール

平成28年7月12日(火)

平成28年9月14日(水)

実施した活動内容

1. 事前指導

2016年7月12日(火)に、共通講義棟R101にて、「癒しの道を歩く健康体験学習」の趣旨説明をおこない、パンフレットを配布した。主に3年生と1年生の交流を深めながら地域文化に触れることを目的としており、学生自身の主体的な参加が必要であることを伝えた。次に、過去に癒しの道を歩いた3年生に体験の感想を話してもらった。各札所を巡り一句を読む癒しの道を紹介した市販のDVDを鑑賞し、癒しの道の歴史や風情について学習した。その後、体育館に移動し、約200名を、1班当たり3年生2～3名、1年生7～9名となるように構成し、20班に分けて各班で自己紹介をするなどの交流を図った。また、歩き方について、身体に負担をかけずにバランスよく歩く方法について練習をおこなった。



2. 歩き本番当日

2016年9月14日(水)、8:00に四国大学に集合し、大型バスに乗り込み9:00前に第一番札所霊山寺に到着した。20班に分かれて、班ごとにまとまって歩くように留意し、適宜コミュニケーションを図りながら、第2番札所に向かって出発した。途中、学生は地域の方々やお遍路さんと交流し、自然を感じながら歩みを進めた。



台風の影響によって、途中雨に降られることもあったが、最終目的地の第6番札所まで全員が無事に歩き終えることができた。四国大学に戻った後は、R101にて最終点呼を取り、レポート課題について伝え、解散となった。

3. レポート課題の分析

今年度の受講生198名に課した自由記述のレポートを基に、過去の受講生の自由記述レポートと傾向を比較し、実施体制と教育効果について検討した。

学生のリポート

■ 行程表（全行程 16km）

	時刻	目的地	活動内容
午前	8:00 集合-8:30 発	四国大学	点呼後出発
	バス移動（約 10.5 km、約 30 分）		
	9:00 着-9:15 発	霊山寺(1 番)	諸注意後出発
	歩 き 1.2 km		
	9:35 着-9:45 発	極楽寺(2 番)	
	歩 き 2.5 km		
	10:20 着-10:30 発	金泉寺(3 番)	
	歩 き 3.0 km		
午後	11:15 着-12:15 発	愛染院(番外)	昼食休憩
	歩 き 2.0 km		
	12:50 着-13:00 発	大日寺(4 番)	
	歩 き 2.0 km		
	13:35 着-13:45 発	地藏寺(5 番)	
	歩 き 5.3 km		
	14:45 着	安楽寺(6 番)	点呼
	バス移動（約 17 km、約 40 分）		
	16:00 着	四国大学	R101 へ移動
	16:30 解散		事後指導



●学生のリポート(1) 今回癒しの道を歩いたことで、お遍路とは人と人の関わりだとわかりました。歩いていく中で人と関わることの大切さを感じました。(中略)歩いているときに地元の方から、「四国大学の学生さん、毎年やね。頑張ってるよ。」と声をかけていただきました。悪天候の中での遍路体験だったので、地元の方からの温かい声掛けがとてうれしかったです。長い歴史を持つお遍路にはお接待という文化があり、古くから人と人の関わりがお遍路さんを支えているのだと感じました。こうしたお遍路という素敵な文化を、私も将来多くの人に伝えたいと思いました。

●学生のリポート(2) 講義を受ける前は、どうして雨の中15kmも歩かなければならないのか、と考えていました。しかし、実際に体験し、私の考えは浅はかであったと痛感しました。一緒に歩いてまわる友達と親睦を深めたり、整備されていない木で覆われた遍路道を通ったり、「お遍路」という古き良き伝統を人や自然とかかわりながら知ることができました。そして何より周りの方々の「温かさ」に直接触れることができ、歩いている道中、私たちを温かく受け入れ声をかけてくださいました。「お遍路」は西暦815年から始まり、昨年で1200年目でしたが、これだけ今も変わらず後世に受け継がれ愛されているのは、こういった地元の温かいお接待があるからだと思うと同時に、「お遍路」の魅力の一つであると思いました。私自身も今回の講義を受けて『自分は一人の力で生きているのではなく、いろいろな人に支えられて生きている』ということを改めて感じる事ができました。

活動成果

今回は198名の学生が参加したが、全員無事に15km歩き終えることができた。大多数の学生のリポートに記載されていたことは、仲間との交流があったからこそ歩き終えることができたということである。歩くことを通して学年を超えた交流がなされ、共に歩き終えたという達成感が得られたようだ。また、小雨の中で実施したため足元のぬかるみや雨に濡れた大気の匂いに意識が向いたようで、例年と比較して自然との触れ合いを体験したと感じている学生も多かった。さらには、驚くべきことに、15kmを連続して歩いたのが人生で初めてだったと答えた学生が2～3%程いた。車中心の地域社会において「長距離を歩く」ということ自体が日常から失われていることの証左であると感じると同時に、そのような時代にこそ、こうした体育授業で生涯スポーツにつながるような体験の機会を保障する必要があると実感した。今年で9回目を迎え、地域の方々にも秋の四国大学生のお遍路体験が定着しつつあり、地域の方々との交流体験等の地域文化を継承するためにも、本活動を継続することの重要性が感じられた。総じて、お遍路を自ら体験することによる地域文化(自然や人とのふれあい)の継承、身体運動体験の確保、運動を通じた仲間との交流及び達成感獲得といった、主体的な体験がもたらされるといえる。

課題及び今後の展望

198名という大所帯での実施に教員3名は一抹の不安があったが、実際に終えてみると入念な事前準備のおかげで大きな問題はとくにはなかった。今回は3年生をリーダーとし、班員は主に1年生という10人前後の班に分かれて実施した。そのため、各班で互いに交流をし、適宜励ましあいながら歩いたことで、学生自身が主体的に取り組めたようである。科目の特性上、積極的身体運動が必須であり、運動を通じた交流も生まれるため学生同士のいわゆる「グループ学習」が望ましい状態で行われたと見受けられる。しかし、グループ内での学習が好ましい状態であれば、200名近くの学生でも実施は可能だが、やはり怪我や事故が起こらないように実施側のサポート体制を万全に整えておく必要があることは言うまでもない。特に大学からスタート地点までとゴール地点から大学までの往復に関しては今後も大型バス等で送迎する体制を継続していきたい。

活動テーマ

「世界の民族スポーツを体験しよう！ー地域貢献プロジェクトの企画運営を通じた人材育成ー」

活動の概要

本研究は「①人材育成」「②地域貢献」を目的とし、学生の就業技術の向上を図ると同時に地域貢献に寄与することを目指した。当初は民間カルチャースクールとの連携で世界の民族スポーツやあそびを体験するプログラム提供を予定していたが、話しを進めていく中で、対象者を限定しない方がより多くの人へ提供できると判断し、2016年7月24日の徳島市水都祭と2016年12月24日の学童施設での実施に切り替えた。体験プログラム内容は参加対象者に応じた民族スポーツ・あそび体験として、計12か国の手あそび、鬼ごっこ、ハンカチ落とし系ゲーム等で構成した。

代表者名：細谷洋子(生活科学部 児童学科 講師)

活動期間／スケジュール

平成28年4月～平成29年1月

ゼミ授業における活動

平成28年7月23日(土)

徳島市水都祭における世界の民族スポーツ体験ブース実施

平成28年12月24日(土)

応神町学童施設における世界のあそび提供実施

実施した活動内容

1. 素材研究 ―なにが学べるのかを探る―(2016年4月～7月)

主に「卒業研究演習Ⅰ」の3年生対象のゼミ活動において、12か国のあそびや民族スポーツの体験をおこなった。参加学生5名は4月～7月の間に自らゲームを体験し、楽しみ方の工夫を試行・考案し、必要な教材を準備した。7月の実施後は、プログラム内容を修正し、12月の実施に向けて世界のあそびをまとめたパンフレットを作成した。既存の日本の伝承遊びとの類似点・相違点について自分たちで考え、世界のあそび・民族スポーツを通して何が学べるのかについて検討した。

2016年7月18日にはオープンキャンパスで高校生約40名を対象に、カナダ、フィリピン、ブラジルのあそびを紹介し、プログラムの模擬実施と修正をおこなった。

2. プログラム実施 (2016年7月23日)

徳島市藍場浜公園で開催された水都祭で、「世界の民族スポーツ」体験ブースを設置し、世界のジャンケン、鬼ごっこ、ハンカチ落とし系ゲーム、チェンズ、カポエイラ等を体験する機会を来場者対象に設けた。のべ20名ほどの子ども達が参加し、共に楽しんだ。



3. パンフレット作成(2016年10月～12月)

世界のあそび・民族スポーツを提供した後も、子ども達自身で楽しんでもらいたいという思いから、A5サイズのパンフレットを作成した。パンフレットの構想段階において、学生達自らが「世界のあそび探検隊」と称し、子ども達に紹介するというコンセプトを設けた。パンフレットの内容は、4月～7月に学生たちが体験したあそびの中から、「手あそび系」2種、「おにごっこ系」6種、「ハンカチ落とし系」2種、「頭脳系」2種、「その他」3種、計12か国のあそびを選定した。参考文献等はあるが、転載は禁止し、自分たちの言葉で、子どもに分かり易いように文章表現を工夫することをルールとして、各自で紙面の構成やイラストを工夫した。例えば右の図は、鬼ごっこ系に分類されるフィリピンのあそびである。基本のあそび方に加えて、かならず応用のあそび方も付記し、参加者の運動能力や人数、参加者の構成等の変化にも対応できるように配慮した。総ページ数は、24ページとなった。

4. プログラム実施(2016年12月24日)

応神町の学童施設におけるクリスマスパーティーで、21名の児童を対象に、世界のあそび体験の機会を設けた。児童は高学年3名、中学年6名、低学年12名であった。児童らは、学生達の訪問に加えて、これまでに経験したことのないあそびの体験ということが重なり、1時間程度の体験を非常に新鮮な表情で楽しんでいる様子だった。学生達の感想として、世界のあそび・民族スポーツは、誰もが初体験のため、これまでの経験に関係なく取り組み、異学年でも対等な立場で楽しめるようだとのことである。また、職員の方々も大変興味を持ってくださり、今後機会があればまた学生達による世界のあそび体験をぜひおこないたいとおっしゃっていた。学生達は、自分らで企画・運営し、指導・支援の仕方を工夫し、練習を重ねて実施した結果、こうした反応があったことで、大きな達成感を得られているようだった。

鬼ごっこ系 プワンブワン【月よ、月】(フィリピン)



逃げられる範囲が限られている、スリル満点のおにごっこ！
オニに少しでもさわられたらアウト！

●用意するもの：丸い線

●適した場所：体育館、運動場など

【あそび方】

- ①直径5メートルくらいの円を描き、真ん中に線を引く。オニ以外の人はみんな円の中に入る。
- ②オニは、円の外から誰かにタッチする。このとき、線の上に足があれば、手や体が円の中に入ってもよい。しかし、もう片方の足を円の中の地面についてはいけない。真ん中の線の上もオニは動いてよい。
- ③タッチされた人が、次のオニになる。

●アレンジしてみよう！

線の上を飛び越えることをありにすると、より迫力のあるものになるよ！



-11-



活動成果

本研究の目的の一つである「①人材育成」に関して、本研究の活動を通じて学生の取り組みの姿勢に変化が見受けられた。

①2016年7月は教員が関係者と交渉したが、2016年12月の学童施設における実施では、参加学生5名が主体となって先方と直接連絡を取り取りを進めた。

②パンフレット作成においては各種目を各学生が担当し、あそび方の説明やイラストなど試行錯誤を繰り返して紙面の工夫をし、原稿を仕上げた。

③2016年12月の事前準備において、パンフレット構想段階時に、学生ら自らが「世界のあそび探検隊」と称し、ユニフォームやコンセプトを考案した。

そして「②地域貢献」に関しては、今回は2回の実施となり、回数は多くなかったが、学生主体で実施のための基盤作り*ができたため、来年度以降の実施に役立てる。

*具体的には、主体的に地域貢献活動をおこなうための、実施場所の確保、プログラムの検討(素材研究と教授法研究)、パンフレット作成等の活動内容と方法が明確化されたことを指す。

課題及び今後の展望

①平成29年度は、学童施設を中心に「世界の民族スポーツ・あそび」体験を実施する。

②「世界の民族スポーツ・あそび」の魅力と意義を再考し、発信する。

今回の実施で、地域のお祭りや学童施設での需要があることがわかったため、平成29年度も、世界の民族スポーツ・あそびの提供プログラムを充実させ、継続していく。特に、学童施設では職員の方々の興味・関心も高く、参加した子どもたちは出前授業としての新鮮さを楽しんでいた様子であった。近年の子ども達のあそびの形態が変化してきていると言われているが、子どもたちへの異文化体験提供を通じて、「身体を動かす楽しさ」「仲間と交流する喜び」「世界の異文化を知る新鮮さ」を味わう好機として、世界の民族スポーツ・あそびの魅力や意義を探るとともに、その体験提供を継続していく。

活動テーマ

課題探求ゼミナールの地域教育的要素の導入による
学習効果向上プロジェクト

活動の概要

健康に関する研究課題について、地域の資料収集や文献学習等の事前学習を実施したうえで、現地調査を行い、実際の現場を見、地域で活躍する人の話を聞くことを導入した。地域の健康に関する研究課題を明確にする視点や方法を学ばせるための教育方法を検討し実践した。

代表者名：武田道子（看護学部、看護学科、教授）

活動メンバー：高橋順子（教授）、小川佳代（教授）、橋本茂（教授）、富澤栄子（講師）、佐藤千津代（講師）、辻京子（講師） 以上看護学部看護学科

連携先名：難病支援ネットワーク、大窪寺周辺地域、子育てホットスペースすきっぷ、大塚国際美術館、なのはな徳島、徳島県庁医療政策課、NPO生涯現役応援隊

活動期間／スケジュール

平成28年3月 学内担当者の事前打ち合わせ

平成28年4月 各ゼミ担当者から連携先機関への依頼・目的説明・打ち合わせ

平成28年4月～7月 各ゼミに分かれて学内事前学習・現地調査・学内まとめ・学びの発表会

平成28年8月 連携先への報告と学内担当者のまとめ

実施した活動内容

目的

3年次前期に配置され、4年次の看護研究に継続する科目である課題探求ゼミナールの地域教育的要素を導入した教育方法の開発を目的とし実施した。

方法

・地域教育的要素として、ゼミナール担当教員と参加学生で設定した健康に関する研究課題について、地域の資料収集や文献学習等の事前学習を実施したうえで、現地調査の計画を立て、実際の現場を見、地域で活躍する人の話を聞くことを導入した。そして、地域の健康に関する研究課題を明確にする視点や方法を学ばせるための教育方法を検討し実践した。

設定テーマ

難病患者、子育て、高齢者、防災、障害児、お接待と健康および絵画と健康の7テーマであった。

アンケート評価

・プロジェクトの評価のため、徳島の特徴、徳島の課題、その課題に対して取り組みそうなことを質問項目とした学生アンケートを実施した。その結果、徳島の特徴として、自然が豊か、交通が不便、健康に関連する資源がある、健康に関連する資源がないなどを学んでいる。

・徳島の人々の健康上の課題として、難病患者に対する知識が低い、地域とのつながりが少なく子育てしている者がいる、精神障害への偏見がある、高齢者の生活が不便、防災意識が低い、障害者の訓練のための条件整備が必要などの地域の課題を知った。さらに、それぞれの課題について学生として取り組みそうなことを考察していた。

学生の発表内容(抜粋)

考察(難病患者の特徴)

- ・南海トラフ巨大地震の災害が発生したときに難病患者が困ることは、治療が継続できない、一人で避難できない、避難所生活が不便であることを挙げていた。
- ・災害対策は、電源確保(人工呼吸器)やお薬手帳の携帯を挙げていた。
- ・近隣への周知はできているが、病気の知識がないため支援体制は不十分であるという課題がある。
- ・防災訓練への参加率が低かったため、避難方法の確認もできていなかった。

まとめ

- ・父親の育児参加度が低いと思っていたが、お聞きした中では予想以上に父親の育児参加度は高いことが分かった。
- ・スキップという子育て支援の場所があることで、母親の息抜きやママ友との交流・育児についての相談の機会を設けることができていた。
- ・スキップでは、県外から来た母親が多いため、慣れない地域での子育てに関する支援が充実していた。



神山村高齢者とのコミュニケーションを通して地域で暮らす高齢者の思い・見えてきた姿とは

- ◆健康に対する意識が高い
 - ◆ADLが高い、維持できている
 - ◆仕事を続けている
 - ◆住民主体の通いの場(サロン)に通うことを楽しみにしている
- サロンの意義：地域の絆が深まる
介護予防の情報が得られる
地域の情報が得られる

インタビュー

- ▶ 徳島県庁の保健師の人の災害派遣の体験談、経験談などを聞いた。
 - ▶ 熊本地震・東日本大震災の被害の大きさの違い。
 - ▶ 実際避難所に行き、その場所ごとに様々な違いがあった。
- 例：避難所の環境整備、屋内と車中泊、ロコミで避難してくる人たち
- ・防災意識の違い
 - ・実際に被害にあった人への関わり
 - ・徳島で震災が発生した際にどのような行動をとるのか
 - ・これからどのような支援・教育をしていかなければいけないのか



学生の学び

ゼミ担当教員名	テーマ	学生アンケート結果		
		徳島の特徴	徳島の課題	取り組みそうなこと
武田 遼子	難病患者の防災支援	県が独自に難病災害手帳を作成している 難病患者の避難訓練率が低い 難病患者があること	南海トラフ地震が予測されているの家具の転倒防止などをしていない 地域住民の難病患者の知識が少ないため、災害時の支援が適切にできない 難病患者の避難方法を確認すべき	災害の話のときは対策をするよう伝える 人が集まる場所で難病患者の特徴を伝える 心肺蘇生法を伝える
高橋 順子	お巡路とお接待	徳島県はお巡路の出発点であり、様々な思いを抱えて巡路に臨んでいる。88カ所巡りの意欲を支えるのが発心の道場における接待である。	巡路者にとって自己の想像以上の険しい道りがある。巡路者のくじけそうな気持ちを如何に支えるかが課題である。	今回は巡路を実体験して、巡路者の気持ちを把握した。次はお接待を体験し支えよう立場で課題を見出し解決した。
小川 佳代	地域の子育て支援	徳島市内の専業主婦の母親が集える環境が少ない	徳島市内の子育て環境を知り、特に転勤族の母親等は地域とのつながりが少なく、相談できる環境を求めている	学生としてできる子育て支援活動を検討する
橋本 茂	画家の心と絵	素晴らしい美術館がある 多くの人が絵の鑑賞に来てくれる	精神障害に対する偏見がある 徳島県人は立派な美術館があっても関心が低い	美術館の素晴らしいさを周囲の人に伝える 精神障害者に偏見を持たず他の人と同じように接する
富澤 栄子	高齢者の生活と健康増進活動	自然が豊か 少子高齢化	少子高齢化 ICTを使わないので情報が得にくい 買い物に不便で時間がかかる 救急医療が整っていない	学生との交流をして情報発信する 地域にいてみて、先入観を持たず、地域の人と交流する 家族や友人と行ってみる 介護予防転倒予防を家庭でも続けてもらえるような支援をする
辻 京子	防災減災のまちづくり	徳島県全体の地震対策は進んでいるが地域では進んでいない	地域住民の減災意識を高める	ゼミで作成したハザードマップを用いて地域住民に避難経路の情報発信する災害時の行動や津波避難ビル、避難場所を友達に教え、家族に伝えてもらう。
佐藤 千津代	障害児の地域ケア	治安の良さ 交通機関が利用しにくいので障害児が利用するための訓練ができない 自然が多い 医療機関が多い 自宅と施設のみで地域交流がない	治安の良さを保ちつつ障害のある人が訓練でき、交通機関が利用しやすい 地域の人でサポートする体制づくり	今回のようなボランティア体験を増やし、地域のことを知りたい 障害児のことを周知する 安全運転する 施設の活動を周知する

活動成果

各ゼミナールのテーマに基づき実際の地域の現場を見、地域で活躍する人の話を聞く機会を得て、地域に根差した看護研究の課題を深め、研究プロセスを進める経験ができた。また、看護職として、地域の健康課題の一端を知り、地域に役立ちたいと思う専門職業人としての意欲がさらに高まった。さらに、知りえた課題に関する情報発信等地域に役立つための方法を考案することができたと考える。

課題及び今後の展望

この成果を基盤に、今後はさらに、知りえた地域課題に関する情報発信等地域に役立つための方法を学生が実践し、模索することをサポートする教育方法の開発を検討する研究に進めたい。このために、研究に参加する教員数を増やしたうえで、多くのゼミナール活動をとおして検証したい。

活動テーマ

精神障がい者との協働による課題解決教育プログラムの開発

活動の概要

精神障がい者とのスポーツやグループワークを介した交流を通して、学生が精神障がい者と共に徳島県の精神保健の課題について考えるプログラムを作成し、徳島県の精神保健福祉に貢献する人材を育成する。

代表者名：藤代 知美（看護学部看護学科 准教授）

活動メンバー：武田 道子（看護学部看護学科 教授）
平田 英治（全学共通教育センター 准教授）

連携先名：徳島県精神保健福祉協会、自助グループα、地域活動支援センターあわっこ
第一病院デイケア

実施場所：四国大学しらさぎ球技場、四国大学共通講義棟

活動期間／スケジュール

平成 28 年 4 月 関係者会議（於四国大学）

平成 28 年 6 月 フットサル講演会・交流会（於四国大学しらさぎ球技場）

平成 28 年 7 月 講演会「大学生と考える！徳島県の精神保健」（於四国大学共通講義棟）

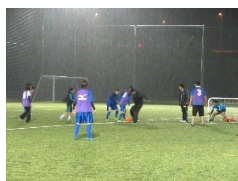
実施した活動内容

【フットサル講演会・交流会】

日ごろよりフットサル活動を行う障がい者とその支援者、四国大学女子サッカークラブイーグレッツ選手、看護学部学生が参加した。

まず、高知県にて精神障がい者フットサルの推進に携わる講師から、「スポーツ（フットサル）が個人にもたらすもの 社会にもたらすもの」という講演を行った。学生・支援者ともに、少人数で実施するフットサルがコミュニケーションを促進することを理解した。

また、交流会においては、徳島ヴォルティス普及コーチ3名の指導のもと、互いに声を掛け合いながら準備運動を丁寧に行い、最後にゲームを行った。



【講演会】

徳島市内の3つの施設・組織に所属する講師3名から、地域生活を送る上での困難と楽しみについて講義があった。講演後、グループワークサポーター7名も加わり、学生はグループに分かれて、心の病気をもちながらも暮らしやすい地域づくりについてアイデアを出しあった。



学生のリポート

全ての学生が、精神障がい者との交流は必要であると答えた。

交流を通して描いた精神障がい者のイメージについて、自由記載式のアンケートを行ったところ、【困難がありながらも生きがいを持って生きている】【一生懸命で明るく生きている】【一般社会人として生活している】【よく考えて落ち着く方法を見つけ出している】【症状による苦痛がある】【個人差がある】の6カテゴリーが抽出できた。

同様に、精神障がい者に必要だと考える支援については、自由記載から、【地域の人に囲まれて生きるための環境づくり】【多種多様な居場所作り】【困難に対処するための手厚い支援の整備】【人として人生を歩むための支援】の4カテゴリーが抽出できた。

表1 学生が考えた必要な支援

カテゴリー	サブカテゴリー
地域の人に囲まれて生きるための環境づくり	人と関わる機会を作る 周囲に支えられる環境づくり
多種多様な居場所づくり	多様な活動の場を増やす 居場所を作る
困難に対処するための手厚い支援の整備	手厚く多岐にわたる支援体制づくり 上手く対処するための支援 不安を受け止める
人として人生を歩むための支援	前向きに生きるための支援 人としての関わり

【人として人生を歩むための支援】は、「病者ではなく、人としての関わり」「特別ではなく普通に接すること」が含まれ、大学生である自分たちができる支援を示した。また、スポーツを通してコミュニケーションがとれ、自分たちが役に立つことを実感したり、反対に当事者から元気を与えられたりしていた。

学外協力者リポート

フットサル交流会に参加した障がい者に、学生との交流の必要性について4件法でアンケートを行った結果、8割以上が「とてもある～少しある」と回答し、「楽しかった」との自由記載が多くあった。

フットサル講演会では、学生のみならず、精神障がい者フットサルの指導に携わるコーチからも、フットサルの意義が理解できたとの声が聞かれた。また、この企画が徳島新聞に取り上げられ、社会に精神障がい者の取り組みを発信する機会にもなった。

講演会においては、参加した全ての障がい者が、「とても良かった～まあ良かった」と回答した。自由記載では、「熱心に考えてくれて励みになった。自分も頑張っていこうと思った」「理解がある社会ではないので、今後につながっていくと思った」「自分と向き合う時間が持ててよかった」との回答があった。



活動成果

先行研究と同様に、交流によって障がい者のイメージが深まり、必要な支援を理解しただけでなく、学生自身が人としてエンパワメントされていた。必要な支援について考えることで、【地域の人に囲まれて生きるための環境づくり】などの結果が得られており、直接交流することは、地域の課題解決のための思考を促進したと言えよう。

また、サッカークラブの学生においては、スポーツを通して自分自身が障がい者の役に立つことが実感された。このことより、障がい者とのスポーツ交流は、互いを支えあう力を持つことが示されたといえる。

課題及び今後の展望

直接交流することで、障がい者のイメージが深まったことから、看護学部の学生以外には教養講座などで交流できる講義を企画し、障がい者理解を促したい。看護学部の学生においては、これまでどおり授業の一部に取り入れる。

また、直接交流は時間とコストがかかることから、交流を疑似体験できるようなDVDを作成し、その効果を測定する。スピードアップして普及啓発されることで、病気の予防・早期発見を促進するとともに、精神障がい者が住みやすい地域づくりにつながり、地域社会が活性化すると考える。

活動テーマ

全学共通教育科目での地域教育的要素の導入による学習効果の向上に関する施行
ー徳島県立文学書道館を活用し地域の文学活動を知り学びを深める取り組みー

活動の概要

本活動は全学共通教育科目「言語と文化」において、地域の文学活動を学生の学びに導入したものである。徳島ゆかりの作家についてその足跡や文学業績を徳島県立文学書道館での研修によって学び、理解を深めるとともに、徳島における文学に関心を持ってもらうことを目指した。

代表者名：全学共通教育センター 佐々木義登

活動メンバー：全学共通科目「言語と文化」受講生
(4年制大学2年生および短期大学部1年生)

連携先名：徳島県立文学書道館

実施場所：徳島県徳島市中前川町2丁目22-1

活動期間／スケジュール

平成28年5月27日	徳島の文学の予備知識(講義)・preアンケート
平成28年6月3日	徳島県立文学書道館研修
平成28年6月10日	学習内容の確認復習・課題提出・postアンケート

実施した活動内容

全学共通科目「言語と文化」において、授業時間を用いて、近隣の徳島県立文学書道館で開催されていた企画展と常設展を訪問した。

まず訪問一週間前に授業の中で地域教育を取り入れることの意義を説明し、「pre」アンケートを実施した。訪問先の徳島県立文学書道館について学生に予備知識を与え、施設訪問後は課題を提出する旨も事前に説明した。

翌週は、バスによって徳島県立文学書道館を訪問。徳島県出身作家瀬戸内寂聴氏をとりあげた企画展(「寂聴対談展」)では、学芸員に解説をお願いし、その後自由に鑑賞させた。学生が普段触れることのない作家の足跡や文学業績をたどり、作家を身近に感じることで、文学作品と地域のつながりを実感することができた。

また、常設展では学芸員の解説とともに展示資料を鑑賞し、徳島ゆかりの文学者の文学活動について学習した。

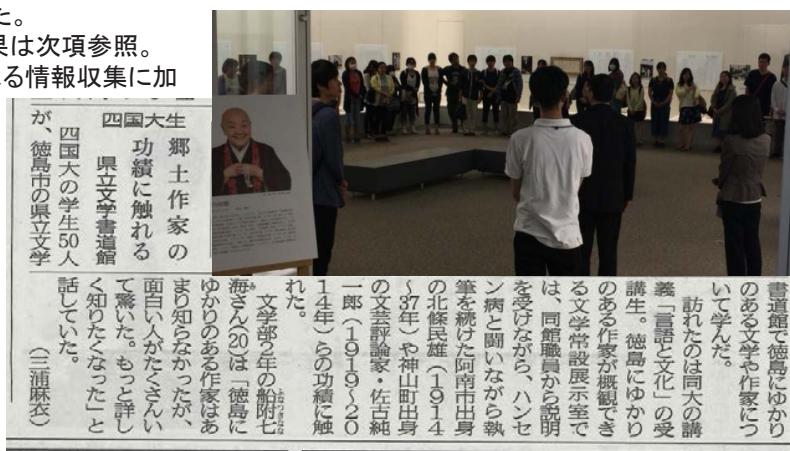
なお、学生には翌週の授業で振り返りの講義を行い、さらに本研修において学んだことをレポートにまとめて提出させることで知識、関心の定着を図った。また「post」アンケートを実施し、本授業が学生の意識にどのような影響を与えたかを検証した。

「pre」および「post」の検証結果は次項参照。

通常行われる講義や文献による情報収集に加え、地域に根差した文学という生きた要素を取り入れることで、言語に対する理解と共に、地域の文化に対する造詣を深めることができた。

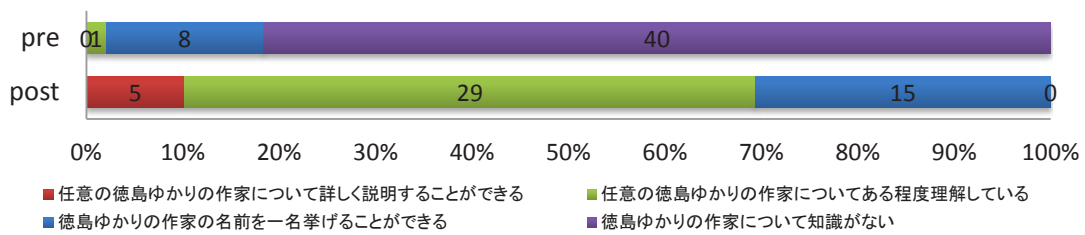
なお今回の試みは平成28年6月15日の徳島新聞朝刊で紹介された。(写真下)

(写真上 企画展「寂聴対談展」で学芸員の方から説明を受ける学生たち)

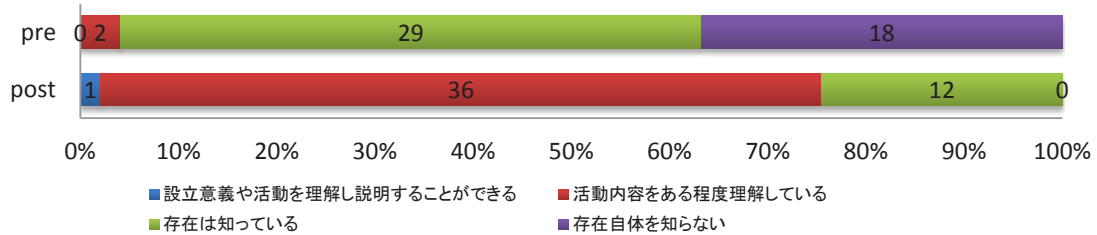


活動成果

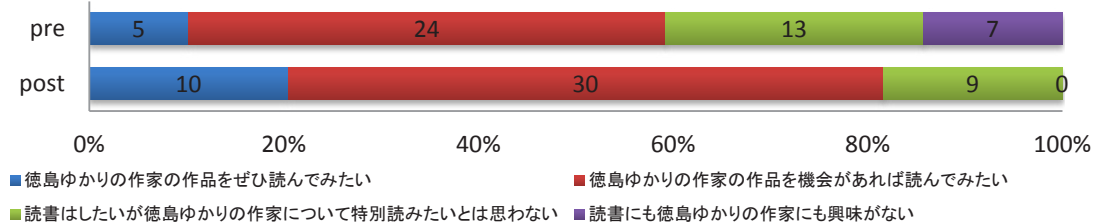
徳島ゆかりの作家の知識



徳島県立文学書道館について



徳島ゆかりの作家への関心興味



地域教育的要素の教育効果を検証するため、本活動に参加した学生に対し授業前「pre」と授業後「post」でアンケートを実施した。「徳島ゆかりの作家の知識」、「徳島県立文学書道館について」、「徳島ゆかりの作家への関心興味」の3点すべてにおいて顕著な変化が見られた。特に徳島ゆかりの作家に対する興味については授業実施前は60%あった関心興味が、実施後81.6%に上昇していた。

学生のレポート

学生には、以下のテーマで課題を出し翌週に提出させた。

1. 今回の企画展「瀬戸内寂聴対談展」および常設展を見て印象に残ったことを書いてください。
2. 常設展を見て興味を持った徳島ゆかりの作家一名について詳しく紹介してください。

ここでは1の課題について書いた学生の意見を複数紹介する。

- ・自分とはくらべものにならない程、長い年月を生きてきた人の考える「恋愛観」は深く重みがあり、それでいて情熱的で若々しさがあることが素晴らしいと思った。
- ・対談の中で遠藤周作氏が、「小説の主題として人間の弱さ、醜さ、しょうがなさ」に惹かれる。立派な人よりしょうがない人に興味や愛情を感じる」と述べていたのが印象的だった。
- ・常設展で印象に残っているのは、復元された瀬戸内寂聴氏の書斎、また彼女の全著作が揃っていたことだ。
- ・山田詠美氏との対談で、夫を亡くした悲しい過去について話す山田氏に「自分の心を通さないものは人の心をつたない」と答えた瀬戸内氏の言葉に感銘を受けた。

課題及び今後の展望

今回の文学書道館訪問はバスでの移動を余儀なくされた。往復で20分以上の時間がかかってしまったため、実際に館内で調べたり鑑賞したりする時間が十分とれたとはいいがたかった。事実学生からは、「非常に興味深い体験だったのもっと時間をとってゆっくり鑑賞したかった」という意見があった。

次回もし機会があれば時間の制約を受けずに学生たちが鑑賞できるように工夫したい。

事前アンケートでは徳島県立文学書道館の存在すら知らない学生が35%に達していた。さらに徳島ゆかりの作家の作品に対する関心も40%の学生が興味がないと答えていただけに、この授業によって彼らの関心が大きく改善した前記のデータを見るにつけ、教育効果は大きかったと認識している。

しかも文学部以外の様々な学部学科の学生が今回の取り組みに参加できたことは貴重な経験になったのではないかな。

今後も文学書道館を用いた地域教育を全学共通科目に取り入れる試みを機会があれば行わせていただきたい。

活動テーマ

学生の書道の力を地域活性化に活用する研究

活動の概要

本研究は、学生の持つ商業的・デザインの効果のある書道技術を地域の人々の多くいる場所で展示・発表することや、イベントでの公開協力をさらに推進することで、地域活性化・学生の就業力育成・書道の文化的価値のPR・学生募集など、多様な目的を実現していく方法を探る。

代表者名 : 太田 剛 (文学部書道文化学科 教授)

活動メンバー : 蓑毛 政雄 (文学部書道文化学科 教授)
辻 尚子 (文学部書道文化学科 教授)

実施場所 : 美馬市脇町、美波町日和佐

実施した活動内容

西部地区

28年度の「希望の書展」は4回目となり、小星地区の福祉施設スカイピアのほか、美馬蚕糸記念館で、糸繰り工場内での書道展示という新たな方式を開発できた。記念館も開館以来、最高の入場者を記録した。「うだつをいける」の看板は、オープニング時にはオデオン座で飾り、その後、吉田家住宅の前に展示された。



「うだつをいける」看板
(美馬市脇町
吉田家住宅)

「第4回 希望の書展」
(美馬市脇町
蚕糸記念館)

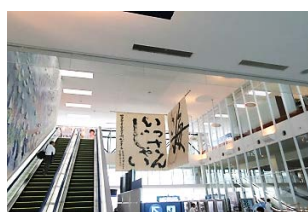


西部地区

美波町の「うみがめ祭り」での協力は伝統となり、28年度は日和佐八幡神社の「ちょうさ祭り」のPRのため、巨大作品を制作して徳島空港ロビーに展示。正月の初詣で日和佐八幡神社でも展示した。さらに、日和佐図書・資料館での「梅とふれあう書道展」では、地元の俳句・短歌の愛好家の短文を学生が作品にした。



うみがめ祭り 書道パフォーマンスちょうさ祭りPR作品「いっさんじゃい」
(美波町日和佐)



(徳島阿波おどり空港ロビー)



初詣展示「いっさんじゃい」
(美波町日和佐八幡神社)



「梅とふれあう書道展」
(美波町日和佐図書・資料館)

活動成果

- ・ 地域社会での様々な活動を通じて、多くの人々の書道文化への関心を高めるとともに、地域のイベントも盛り上がり活性化した。
- ・ 学生も地域住民と交流する機会が増え、大きく視野を広げコミュニケーション能力も高まった。
- ・ マスコミにも取り上げられ、作品の書道技術を称賛されることで、書道文化の価値の重要性に気付き、さらに書道技術を社会に積極的に発信しようとする意欲も出てきた。

課題及び今後の展望

- ・ 学生が教室で修練して幅を拡大した書道表現を、展覧会以外にもさらに様々な形態で社会に公表する方法を考え、社会での書道の活躍場面や、人々の関心を高めていく。

活動テーマ

徳島県の過疎地域における次世代の医療・福祉を担う人材育成
ー看護学部生によるキッズナースの育成ー

活動の概要

地域活性化の条件として医療・福祉は欠かすことのできないインフラストラクチャーである。ところが、過疎化により地域医療を支える人材が不足している。特に、訪問看護ステーションでは看護師不足により閉鎖を余儀なくされている。また、地域中核病院でも、若い人材が不足している現状がある。

このような状況の中、本事業は本学と地域医療施設と共同で次世代(小学生)に地域社会や職業に対する考え方を調査し、将来地域医療福祉を担う人材育成を目指す地域活性化の一助として推進するものである。合わせて当学部生が看護職としての魅力を伝えるものである。平成26・27年度は徳島県西部(つるぎ町、美馬市)を対象としてつるぎ町立半田病院と協働した。平成28年度は、引き続きつるぎ町立半田病院と、新たに勝浦町・上勝町を対象に行政と勝浦病院と協働しキッズナース事業を実施した。

代表者名 : 橋本 茂 (看護学科教授)

活動メンバー: 小川 佳代(看護学科教授)

中澤京子, 江口美希, 横関恵美子, 長尾多美子, 棧敷久美子

四国大学看護学部生 2年次生, 3年次生, 4年次生

連携先名 : つるぎ町立半田病院, 長尾春美看護部長他看護師

: 勝浦町役場, 上勝町役場, 中田敦士他役場職員, 保健師(当学卒業生含)

: 勝浦病院 岡本美智子看護師長他看護師

活動期間／スケジュール

平成28年5月～7月 県西部地区キッズナース事業実施計画作成及び打ち合わせ

平成28年7月24日 美馬市、つるぎ町対象のキッズナース事業実施

AM四国大学 PMつるぎ町立病院

平成28年6月～9月 県央中山間部キッズナース事業実施計画作成及び打ち合わせ

平成28年10月23日 勝浦町・上勝町対象のキッズナース事業実施

AM四国大学 PM勝浦病院

実施した活動内容

※キッズナース事業とは、

当学看護学部が、地域の中核病院と連携し、中核病院近辺の小学生を対象として当学に招き、看護学部生によるキッズナース授業を実施する。その後、地域の中核病院を医療者の立場から見学していただき医療・看護に興味を持っていただく。このプロセスの中で将来、地域で医療福祉に貢献できる人材の育成および地域の医療福祉は地元の人材で賄う、つまり人材の循環を目指す事業である。



実施した活動内容

- 【目的】地域のキッズ(小学5～6年生)に看護師(キッズナース)を体験していただく
地域の医療保険福祉に関心を持っていただく
- 【対象】美馬・三好地区(小学生11名、保護者7名、病院職員15名(本学卒業生含))
勝浦町・上勝町(小学生12名、保護者9名(内行政2名)、病院職員保健師7名
(本学卒業生含))
四国大学 2・3・4年次生(15名)、教員(7名)
- 【方法】1.大学で模擬授業を体験する(看護学部生が指導する)
2.看護の立場から病院見学を実施する(半田病院看護師)
3.半田病院看護師、四国大学看護学部生・教員との意見交換
- 【体験・見学内容】
オリエンテーション



①模擬授業

- ・看護の仕事(仕事の内容、仕事の間、遣り甲斐、等)



②バイタルサイン測定

- ・体温、脈拍、血圧測定を行う



③聴診器を使用した体験

- ・モデルの人形を使用して呼吸の音や心臓の音等を聴く



④赤ちゃんの着替え ・赤ちゃんモデルを使用して着替えの体験



実施した活動内容

⑤清潔手洗い体験

- ・自分で手洗いを行い、その後グリッターバグを使用して測定



⑥白衣の着用

- ・白衣を着用し、記念撮影(病院見学後まで着用)

⑦看護学実習室見学

- ・基礎看護学実習室(7F)成人・老年看護学実習室(6F)地域・在宅・精神看護学実習室(5F)

つるぎ町立半田病院

- ①病院の役割、看護の役割について
- ②病院内見学
- ③看護師の仕事見学



意見交換

小学生と学生との意見交換。



学生のレポート

- ・小学生に基本的看護技術を教えることがこんなに新鮮で楽しいと思わなかった。
- ・自分が看護師になろうと思った、原点に帰ることができた。
- ・小学生やお母さんたちにこんなに喜んでもらえてうれしい。モチベーションが上がった。
- ・徳島県の問題は糖尿病だけでなく、過疎地の医療問題も考える必要があると思った
- ・本日出会った小学生と将来、一緒に仕事ができたらいいなと思った。

参加者のレポート

県西部地区【美馬市・つるぎ町(半田病院)】

小学生

- ・赤ちゃんを抱っこしたり着替えたりが楽しかった。
- ・人形で心臓や腸などの音を聴いたとき、自分もこんな音がするのかなあと思った。
- ・病院で看護師はエレベーターに患者さんがいると絶対に話しかけることに驚いた。

保護者

- ・正直地域創生事業を実感したことはありません。少子高齢化や子育て環境等特に良い方向に向かっているとは思えません。魅力的な企業がない以上若者は都会へ行くと思います。
- ・本日は本当にありがとうございました。子供も今日の気持ちを忘れず、看護師を目指して歩んでほしいと思っています。
- ・四国大学の学生さん、とても清潔感があり、優しさが感じ取れました。不安いっぱいで行く病院もあの子たちみたいなナースがいてくれたら、不安も半減されるだろうなと思います。

県央地区【勝浦町・上勝町(勝浦病院)】

小学生

- ・保健師という職務があることに驚いた。
- ・赤ちゃんの着替えや包帯を巻くことが楽しかった。
- ・腸や肺にも音があったこと。家のキッチンが動いたり風呂場に運んでくれる機械があったことに驚いた。

保護者

- ・娘に看護職体験させることができよかった。
- ・子供がその気になり、うれしく思った。これからの方向性が見えてきた。
- ・子育てや老後にやさしい街づくりが勝浦町はできていると思います。
- ・若い方に移住定住をしてもらいたい。人口減少に歯止めをかけ消滅自治体にならないように施策を講じていきたい。

活動成果

- ・本学看護学生が既習の看護学を小学生に伝えることでモチベーションの向上や、地域創生事業について住民から直接話を聞き、地域完結型医療におけるCOC事業の目的の理解が深まった。
- ・勝浦町においては今後3年間は実施したいと要望が有り予算処置を講じていただいた。
- ・母子ともに「絶対に本学に来たい」「出来れば四国大学に入学させたい」と評価もあり、医療・福祉を担う次世代の人材育成の目的は達成しつつある。
- ・参加者(小学生、父母、施設職員、行政、参加学部生、教員)はCOC事業の目的と課題を共有することができた。
- ・勝浦町教育委員会からは、中学生に実施の要望があり、現在実施の方向で検討している。

課題及び今後の展望

参加者の評価は高いが、現在の実施方法では、移動費に無理が生じる。対策として、サテライトオフィスをキャンパスとして活用、大学と地域病院での事業を別日開催とする、行政に働きかけキッズナース事業を売り込む等が考えられる。

カリキュラム化には、全てのプロセスを学生主体で経験することがCOC事業の目的と相まって教育効果が高いと考えている。しかし、単年度生全員が参加するには事業規模が大きすぎるので難しい。

今後、学部内の他のCOC事業と組み合わせることで可能になるので検討したい。

活動テーマ

寺院文化財調査研究スタッフ育成プログラムの開発

活動の概要

今まで詳細が不明であった薬王寺と日和佐の街の歴史、四国霊場の歴史と文化を明らかにすることを目指し、地域振興・観光文化に資する貴重な文化財の価値を適切に評価するための調査研究スタッフの人材育成及び育成プログラムの整備を目的とする。

代表者名：須藤茂樹（文学部 日本文学科 教授）

活動メンバー：會田 実（文学部 日本文学科 教授）

平川恵美子（文学部 日本文学科 非常勤講師）

曾我部遥・立井佑佳・野本竜生・河原奈津美・淡井七恵（日本文学科4年生）

阿部愛未・四宮朋佳・志内瑞菜・藤野江美（日本文学科3年生）

鎌田佳緒里・森本茜・結城千鶴（日本文学科2年生）

連携先名：四国霊場23番札所 薬王寺

実施場所：四国霊場23番札所 薬王寺

活動期間／スケジュール

平成28年 11月27日（日） 古文書調査実施

平成29年 2月11日（土） 古文書の選別調査実施

平成29年 3月7日（火） 本格調査並びに古文書調査実施

平成29年 3月10日（金） 本格調査並びに古文書調査実施

平成29年 3月14日（火） 本格調査並びに古文書調査実施

実施した活動内容

平成26、27年度実施の基礎調査を踏まえて本格調査を行い、学生の調査技術の習得、向上を目指した。フィールドとして、美波町所在の四国88ヶ所霊場23番札所薬王寺を選び、所蔵の典籍や古文書を調査対象とした。

現地調査では、未調査のまま所蔵されていた大量の典籍類を1点ずつ確認し、カードを作成した。あわせて古文書調査を実施し、古文書の選別と写真撮影と採寸を行った。これらの作業を通して判明した資料の数量調査や文献の内容を、次年度以降にも利用出来るように調査結果データとして記録した。

そのほか、学内附属図書館や県立図書館などで薬王寺所蔵の典籍や古文書に関する関連資料の調査及び収集を行った。

学生のレポート

四宮朋佳：日本文学科3年 現地で資料調査を体験できて有意義でした。

阿部愛未：日本文学科3年 現地で資料調査を体験できて、原典にあたる重要性がわかりました。卒業論文は薬王寺の古文書で卒業論文を書くつもりです。



活動成果

調査対象は極めて難解ではあるが、古文書・典籍類の原本を用いて本格的な歴史研究の調査方法の基礎を学生たちが習得することができた。この原本調査は感動を得ることになったようで、一般社会においても大きな原動力になると考える。

また、参加者はみな、博物館学芸員資格取得を目指す学生であり、博物館学芸員の実務を学ぶこととなった。

これらの調査を通じ、資料読解技術、資料整理能力など博物館学芸員として必要な力を身に着けるとともに、調査員どうしや地域住民との交流を通して、コミュニケーション能力の上昇や問題解決能力の習得ができた。

本研究成果に関して、平成28年度7月2日(土)薬王寺本坊にて、美波町文化財指定記念薬王寺寺宝展を記念し「薬王寺の文化財」と題して講演を行った。

課題及び今後の展望

寺院文化財の発掘により、地域の教育、観光に役立てることが可能となる。また、地域住民との交流も生まれ、地域の活性化につながるができる。

また、未公開資料の調査であるため、今後の四国霊場研究に資すること多大である。

今回の調査は文化財研究における全体的な取り組みの一部であり、今後も何らかの形で調査研究が継続されることを強く望む。

活動テーマ

人とサルと自然との共生体験学習を通した
地域貢献型人材キャリア形成プログラムの構築

活動の概要

サルの冬場の餌とならないよう過疎高齢化しているゆず村(木頭)を応援し、そこで暮らす人々から生活と文化と自然との交流を体感し、人とサルと自然との共生体験学習を通して、一人ひとりの自らのキャリアについて考えるワークキャンプ。

代表者名 : フェネリー マーク (文学部, 国際文化学科, 准教授)

活動メンバー : 四国大学学生キャリア形成実践受講者
学生ボランティア・学生ボランティア活動支援室スタッフ

連携先名 : 那賀町役場木頭支所 木頭ゆずクラスター協議会 那賀町地域おこし協力隊

実施場所 : 那賀町木頭

活動期間／スケジュール

平成29年9月9日 ～ 平成29年9月10 事前調査

平成29年10月27日 打合せ

平成29年12月1日 ～ 平成29年12月3日

実施した活動内容

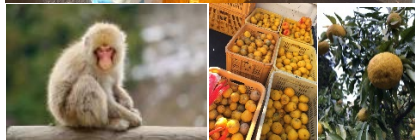


平成29年12月1日(金)～3日(日)那賀町木頭地区において、本年度で4回目の「人とサル共生プロジェクト～ゆずちぎり隊～」を「地(知)の拠点事業」の支援を得ながら実施いたしました。(主催:四国大学学生ボランティア活動支援室・木頭ゆずクラスター協議会・那賀町地域おこし協力隊)。参加者は、本学の「キャリア形成実践科目」受講生・「学内募集」学生計24名と本学学生OBボランティア等計29名でありました。この活動は、木頭地区のサルのえさ場となっている急斜面のゆず畑の取り残しを完全採取することと、ゆず古木を伐採するというプログラムでした。今回で4年目を迎え、毎年私たちが放置されていたゆず畑を完全に整備して、サルが里山に降りてこない環境づくりが少しずつ出来上がり、地元住民からは大変感謝され、私たちの目的である「人とサル共生プロジェクト」の成果がやっと現れてきました。



また、旧木頭村の郷土料理(木頭風シシ鍋、鹿肉鍋、かきまぜご飯)を頂き、木頭の風土や文化に触れながら、本年度は収穫した「ゆず」を絞り、「天然ゆず酢」の商品化への挑戦として、参加学生全員で瓶詰とラベルづくりのコンテストを行い、地元木頭ゆずクラスター協議会へ提案してきました。

学生のリポート



まずは、サルの捕獲ではなく、人間の知恵を使っでの共生であることを深く理解できた。

伐採は大変であったが、チームワークの大切さと集中した真剣な作業であった。

残され放置されたゆずをひとつ残らずちぎるとかなりの充実感を味わった。

普段できない体験であった。また地域のために木頭の村のためにも少しでも力になりたい。

素晴らしい所を知った。木頭が好きになった。この活動のアピールをしていきたい。

自然の中で、人の温かさを身近に感じることができ、自分の心の小ささが恥ずかしくなった。

一人で参加し地域の人や先輩とも仲良くなれ、本当に幸せでした。

人生の先輩と色々話ができ、いろいろな生き方を知り、自分の考えの幅が広がった。

ボランティア活動には幅の広い活動があることを体験からわかった。

川のせせらぎ、鳥の鳴き声、早朝の凜とした冷えた空気、山の木々の陰陽、そして魅力的だったのが色々な所につながる小道、木頭は本当に良かった。



活動成果

本活動は、木頭地区のサルのえさ場となっている急斜面のゆず畑の取り残しを完全採取することと、ゆず古木を伐採するプログラムであり、今回で4年目を迎え、サルが里山に降りてこない環境づくりが少しずつ出来上がり、私たちの目的である「人とサル共生プロジェクト」の成果がやっと現れてきた。地域貢献型人材キャリア形成プログラムの構築として、学生アンケートから「人と関わる大切さ、チームワーク・コミュニケーション能力、自然とのバランスなどを学びました」。充実感を感じた(95%)、将来について考えるきっかけとなった(そう思う、どちらかといえばそう思う、合わせて96%)、地域の方と交流できたか(そう思う、どちらかといえばそう思う、合わせて91%)という結果が見られました。事後アンケートのコメントの中から、このプログラムを通して、徳島県の少子高齢化が進んでいる状況に気づき、そして地域の問題を自分事のように身近なことに感じた。このように学生が今後の徳島県の問題に向き合う体制も見られました。

課題及び今後の展望

・木頭における活動報告の充実・まだ十分に地元の方々に活動の理念・成果を報告されていない。那賀町地域おこし協力隊の情報誌などを通して報告の検討をしている。

・今後はもっと外国人ボランティアを受け入れている団体(NICE)とコラボで実施を検討している。外国人ボランティアと共に作業することでキャリア形成実践受講者が将来の生き方・キャリアに対してさらなる進化が期待できる。

・「天然ゆず酢」の商品化を検討している。活動費のためでも、活動の広報としても期待できる。学生の知恵でラベルなどを通して多くの方々に活動の意味と理解が期待できる。



活動テーマ

初年次教育としての多人数による地域教育の有効性に関する研究

活動の概要

本プロジェクトは、四国大学における全学共通選択科目として位置づけられる科目「健康スポーツ」(児童学科1年生139名が受講)において実施されている「いやしの道を歩く健康体験学習」を通じた地域教育の有効性を明らかにすることを目的とした。

代表者名 : 田村典子(生活科学部児童学科教授)

活動メンバー : 范永輝(生活科学部児童学科講師), 細谷洋子(生活科学部児童学科講師)

実施場所 : 四国大学～第1番札所霊山寺～第6番札所安楽寺～四国大学

活動期間／スケジュール

平成29年7月11日(火) 14:40～17:50 事前指導

平成29年9月13日(水) 8:00～16:30 いやしの道歩き
16:30～18:00 事後指導

実施した活動内容

四国八十八ヶ所の遍路道についての歴史的背景や参拝の作法を理解し、遍路道の1番札所から6番札所までの約16kmを一日かけて歩く過程において「お接待文化」や「参拝」を体験することで、地域文化理解を図った。

受講生139名は、13名～15名ずつのグループとなり、集団で行動し、各寺院では作法を意識して参拝をおこなった。2番札所においては住職の法話を拝聴し、参拝の作法を学んだ。また、全受講生は他の参拝者や地元の方々へのインタビューを行い、様々な人々の想いによって支えられている四国遍路の歴史文化としての価値について理解を深めた。



時刻	目的地	活動内容
8:00 集合 8:30 出発	四国大学	点呼後出発
バス移動(約10.5km, 約30分)		
9:00 着 9:15 発	霊山寺(1番)	諸注意後出発
	歩き 1.2km	
9:35 着 10:15 発	極楽寺(2番)	住職による法話
	歩き 2.5km	
11:00 着 11:10 発	金泉寺(3番)	
	歩き 3.0km	
12:00 着 12:50 発	愛染院(番外)	昼食休憩・住職による法話
	歩き 2.0km	
13:30 着 13:40 発	大日寺(4番)	
	歩き 2.0km	
14:20 着 14:30 発	地藏寺(5番)	
	歩き 5.3km	
15:40 着 15:50 発	安楽寺(6番)	点呼
バス移動(約17km, 約40分)		
16:30 着 18:00 解散	四国大学	事後指導

学生のリポート

(1) 遍路体験を通じた人との触れ合いについて

一番驚いたのは、地域の方々がたくさん声をかけてくださったことだ。「こんにちは」「どこの学校で?」「気づいていってらっしゃい」など、あたたかさを感じた。中には、娘が四国大学の児童学科に通っていたと話されるおばあさんもいた。歩くのに足が疲れていても、こうして地域の方たちとお話することで、元気をもらえた。

(2) 遍路体験を通じたお遍路の伝統について

歩いている途中に出会った方が優しくしてくださるのは、私たちがその道を通るまでにたくさんのお遍路さん、いろんな思いを背負いながら歩いているのを知っているからだと思う。そんな人たちがいるからこそ、お遍路をやってみたいと思う人や、最後までいってみようと思う人が増えているのだと思った。

(3) 遍路体験を通じた自己発見について

参拝に来ているだけあって目的や意味がある。自分が生きていることも単純だけどすごいことだと思し、誰かを大切に思う、誰かに大切と思ってもらうことは形がなくなってしまうも届けられるような気がした。お遍路はただ歩いて終わりではなく、人の優しさ、自然の美しさ、自然の豊かさ、水の美味しさなど、生きていることに感謝できるようなことをたくさん考えさせてくれた。



活動成果

本授業終了後に受講生が提出した自由記述感想文によると、地域の人々や参拝者と積極的に関わったことにより、地域に根づく遍路道への歴史背景への気づきや、地域文化として遍路道文化を保存する意識の高まりが見受けられた。

道中において他の一般参拝者や、住職、地域の方々へと積極的にかかわるようにし、適宜インタビューを各受講生がおこなった。また、グループごとに活動したことによって、受講生間の交流も深まり、初年次における人間関係の構築にも有効であることが考察された。

課題及び今後の展望

近年の四国遍路の世界文化遺産登録への気運の高まりや、観光庁によるウェブサイト上での観光ルート「四国遍路」の紹介を踏まえ、今後さらに加速する四国遍路の観光資源化について理解を深められるように、学習内容を構成していく必要がある。また、地元の人々の外国人参拝者への「お接待」におけるニーズ調査も含めて、地域貢献活動につなげていきたい。



活動テーマ

「子育て支援の専門性」を育てる授業内容の研究
ー子育て応援パフォーマンス しこぽんずの活動を通してー

活動の概要

地域子育て支援に尽力できる教育・保育の専門性を有する学生育てが必要と考え、座学と実学の協働を目指し、活動内容を地域子育て支援施設を中心とする中で、学生の保育者としての資質・能力の向上を目指した。

代表者名：兼間 和美(生活科学部児童学科)

活動メンバー：主な活動メンバー 生活科学部 児童学科 4年生7名 3年生10名

連携先名：徳島県教育委員会、県内保育所、子育て支援センター、幼稚園、児童館、他

実施場所：徳島市立国府保育所在宅育児支援室あいあい、富田幼稚園、富田保育所、吉野川市ちびっこドーム、助任仲よし認定こども園、鳴門ドイツ館 他

平成29年度／スケジュール

5月 徳島県 徳島新聞社共催「おぎゃっと21」	10月 徳島市立国府保育所在宅育児支援室
6月 児童学科主催 あそびと学びのフェスティバル	10月 徳島市助任仲よし認定こども園子育て支援運動会
7月 徳島市立国府保育所 在宅育児支援室	11月 吉野川市 ちびっこドームまつり
7月 徳島市立富田保育所 夏祭り	11月 児童学科主催 あそびとお話しの会
7月 鳴門市 第九の里まつり	12月 徳島市立富田幼稚園 親子で集うクリスマス会
8月 吉野川市子育て支援センター夏祭り	12月 中・四国保育学生研究大会(香川県 四国学院大学)
9月 徳島市立富田保育所運動会	2月 助任仲よし認定こども園 あわっこ発表会

実施した活動内容

学生の大学での学びを、地域子育て支援施設等で実際にパフォーマンスさせてもらうことで、学生の保育技術の向上と、子ども理解に繋がると考えた。そこで、短時間であっても、気軽に施設を訪問し「出前保育」をすることで地域子育て支援に貢献してきた経過が次第に認められ、最近では、地域の子どもに関わる施設からの依頼が多くなり、学生もそれが次への学びへの意欲に繋がっていると実感しているようだ。

また、地域子育て支援施設では、子どもだけでなく子育て家庭の家族との交流も多く、学生のキャリア支援にもつながり、目指す職業に対する理解と期待がますます大きくなっていることが、学生のパフォーマンス内容からも読み取れる。今後も、地域に根差した大学として、また地域子育て支援の拠点としての大学を目指し活動を続けていきたい。

保育所夏祭り



吉野川市ちびっこドームフェスティバル



認定こども園子育て支援 生活発表会

学生のリポート(ボランティア活動報告書より)

・親子で楽しめるふれあい遊びを取り入れることで、子どもたちだけでなく保護者も一緒に楽しめるということがわかった。例えば紙人形劇『だるまさんが』の絵本をただ読み聞かせるのではなく、ペーパートという形に替え、ペープサートとして動きをつけてみた。ペープサートとして動かすことで、子どもたちも自然とだるまさんの動きを真似、体を動かし始めることで、その場の雰囲気が一挙に楽しい雰囲気となり、自分たちも、どんどん動きがよくなった経験をする事ができた。(3年生)



・子育て応援パフォーマンスの活動から、はじめは反省することが多かった。しかし、その反省点を踏まえ、全員が毎回、内容を振り返り、改善点を見出し、改善を繰り返し、親子がパフォーマンスを楽しめるように試行錯誤していった。子どもたちが笑顔で楽しむ姿をみて、保護者も笑顔で安心して過ごせる時間と空間の確保が必要であると理解できた。(4年生)

学外協力者リポート

《上八万児童館指導員》

この度は、うちの児童館で、県教育委員会の親なびワークショップを実施して、託児の学生さんをお願いしたところ、学生さんたち、とても良く子どもたちをみてくれました。ありがとうございました。

そしてまた、今回、ふれあい健康館での「児童館フェス」に学生サポーターをお願いしたところ、心よくお引き受けいただきありがとうございました。



《徳島市川内保育所 子どもたち&職員》

川内保育所の子どもたちが、徳島公園へザリガニ釣りに出かけるとのことで、サポートをお願いされ、学生が付き添う後日、職員の皆様と子どもたちからお礼の手紙が届いた。



活動成果

保育とは、子どもたち一人ひとりの発達の違いを認め、保育者(幼稚園教諭、保育士)の保育観も、みんな違って当然であることを理解する必要がある。また、保育には、これが正解ということはなく、むしろ、その時、その場面で保育者としていかに臨機応変に対応できるかということが重要である。

つまり、保育は、座学と実学の協働からの学びで確立されていくものであり、アクティブラーニングの繰り返しと、常に、自己評価と反省、考察の繰り返しが要求される。

この学びの成果を中・四国保育学生研究大会に於いて発表することで、保育を可視化する方法まで学びを深めることができた。



課題及び今後の展望

たとえ、短時間であっても「出前保育」を望む子育て支援施設への訪問は、今後も続けていきたいと考えている。それは、むしろ学生のキャリア支援につながり、保育学生としての必要不可欠な学びと今後の学びへの意欲につながると考えている。そして、それが保育者となるための自信に繋がると考える。

今後も、地域子育て支援の拠点となる大学を目指して、養成校として学生に育てるべき資質・能力とは、どのような内容、能力であるかを常に実践研究し続けていく必要があると考えている。



活動テーマ

世界の民族スポーツ・あそび探検隊！
―出前ワークショップの企画運営を通じた人材育成―

活動の概要

本研究は、世界の民族スポーツやあそびの出前ワークショップを通じて、運動遊びの機会確保ならびに国際教育の実践を目指すものである。ワークショップ（以下WSとする）ファシリテーターの人材育成、WS内容の充実、地域貢献として学童施設において児童への世界の民族スポーツやあそびの機会の提供を行った。

代表者名：細谷洋子（生活科学部児童学科講師）

活動メンバー：生活科学部児童学科 身体文化ゼミ学生

3年生 梶本あかり、野村奈美、青木拓巳、井内綾菜、豊成哲也、森瑞希、吉永誉

4年生 吉田千尋、仁木博子、中山紗由美、岡田将良、岡田勇人

実施場所：北島北児童館（徳島県板野郡北島町北村字壱町四反地18-1）

北島東児童館（徳島県板野郡北島町中村字本須76-7）

活動期間／スケジュール

平成29年6月 事前打ち合わせ

平成29年7月 WS実施

平成29年11月～平成30年3月 「世界のあそび」小冊子作成

実施した活動内容

2017年6月～9月に徳島県内の2つの学童施設において計9回のWSを実施した。異文化として、様々な地域の身体文化の豊かな広がりを、知識を踏まえた上で体験できるように、各地域の紹介用紙芝居やクイズパネルの作成をおこない、あそび体験前に異文化への興味関心を喚起する時間を必ず確保した上で、あそび体験を実施した。さらに、WSの内容について、世界各国・各地域のあそびに日本の伝承遊びを加え、それぞれのあそび方のアレンジ方法を考案したものをまとめ、小冊子を作成した。



学生のレポート

吉永 誉(3年) : 私はこの冊子を作るにあたって、たくさん子どもたちと一緒に遊んだり、調べたりしてきました。調べるときには、「この地域にはこんな遊びがあるんだ」と新しい発見があり、とても面白かったです。子どもたちと一緒に遊ぶときには、指導するということで子どもたちが理解しやすい話し方や聞き入ることが出来るような口調など、難しいところがたくさんあったり、次回に改善しないといけないなと思うところが見つかったりして、教育者を目指すわたしにとってはすごく有意義な時間でいい経験になりました。

梶本 あかり(3年) : 近年遊び自体が変化している中で昔の遊びや世界の遊びに触れて、自然にあるもので出来る遊びや、一から自分たちで作って遊ぶ遊び、頭を使う遊びなど遊び方にも様々な形があるんだなと思いました。それを実際に子どもたちに指導するとなったとき難しさを痛感しました。中でも遊び指導するにあたって必要と思われるタイミングに適切な言葉がけをすることです。どのような言葉を選んでわかりやすく子どもたちに心を掴んでもらえるかが難しかったです。しかし、もう一回やりたい、いっぱい動いて楽しいと言ってくれたときは嬉しかったです。それと共に友達と関わり、友達の存在がやる気や競争心が生まれ、それを見守ったり励ましたり指導したりして安心して挑戦できるんだなと、改めて遊びは大切だなと感じました。

森 瑞希(3年) : 子どもに遊びを教えることは難しいことだと感じました。どのようにすれば子どもが楽しく遊べるか、ルールは分かりやすくするためには、どうすれば良いのか、色々考えることがたくさんありました。実際子どもと楽しく身体を動かすと自分自身も子どもと同じくらい楽しんでいて、遊びを共有して楽しむことは素敵なことだなと感じました。一緒に身体を動かしていくうちに子ども達もルールを理解し楽しむ姿が見れました。遊びをしていく中で1番に子どもの目線になり遊びを進めていくことが大切だと感じました。大人ができて子どもができなかったりすることもあるのでしっかりと、そこを理解していくことが大切だと分かりました。

青木 拓巳(3年) : 私はこの活動を通して様々な事を学びました。例えば、いつも子ども達が遊んでいる身近な場所にも危険が潜んでいるということです。そこで私達大人が注意し、事前に怪我を防ぐことで安心して遊ぶことが出来ると考え、私達の活動成果が将来役に立てばいいなと思いました。

活動成果

- ・本研究の活動を通じて参加学生らは、対象に応じた遊びの展開や世界の遊びへの興味喚起を促すための教材研究スキルに向上が見られ、自身の就業技術に自信を高められたようである。また、国際教育への見聞を卒業論文研究を通じてさらに個人的に深めた学生もあり、国際社会における様々なニーズに身体活動を通じてアプローチする人材育成に寄与したといえる。
- ・本研究の活動による地域貢献を目指したが、北島北児童館、北島東児童館の二か所において、9回の活動を実施することができた。アンケート調査によるとプログラムに参加した子どもの7割が世界の遊びの魅力や運動遊びの楽しさに興味関心が高まった。

課題及び今後の展望

- ・世界の民族スポーツ・あそびの提供プログラムを充実させ、国際教育ならびに体育教育を同時に目指せる複合的なプログラム提供が可能な人材育成を継続する。
- ・近年の子どものあそびの形態変化を踏まえ、子どもたちへの異文化体験提供を通じて、世界の民族スポーツ・あそびの魅力や意義を探るとともに、その体験提供を地域貢献活動として継続していく。

活動テーマ

徳島の近代産婆の活動分析によるあらたな開業助産師モデル開発と教育内容への反映

活動の概要

本研究は、徳島の産科医療の初期を支えた賀川流産科と近代産婆の発祥の関係を歴史的に分析し阿波藩の信頼を受け御用産婆として活躍した上田竹雄の助産技術へ影響を分析し明治時代の助産業務・専門性を明らかにすることを目指した。

代表者名：高橋順子（看護学部、看護学科、教授）

活動メンバー：須藤 茂樹（文学部日本文学科、教授）
高田 律美（看護学部看護学科、准教授）

連携先名：四国大学看護学部看護学科

実施場所：徳島県徳島市応神町古川戎子野

活動期間／スケジュール

平成29年10月～30年3月 調査前に内容の打ち合わせを実施

平成29年12月15日～16日 大阪 随時 打合せ

平成30年2月13日 公開研究会

平成30年3月9日 伊吹島産院後、民俗資料館調査

実施した活動内容

平成29年12月15日、上田タケヲの孫である上田博章氏宅を訪問し聞き取り調査を行った。調査内容は、上田タケヲ(1872-1923)の人物像や産婆二代記を出版に至った状況、孫の立場から見る上田タケヲの人物像、語り聞いた上田竹雄(1833-1907)の存在や、賀川流産科との関わりについて詳細に調べることができた。上田博章氏に上田竹雄氏及び上田タケヲ氏の人物像や産婆二代記の出版に至った状況、収集した関係資料を見せていただいた。

また、平成30年3月9日、伊吹島に保存されている伊吹産院跡を訪れ、昭和58年解体前の写真と跡地から状況を知ることができた。伊吹島民俗資料館に残る、伊吹産院の全景、産褥婦の語らい、布団干し等の日常生活、沐浴、新生児の【船】「乗り始め祈願」等の様子、また、昭和5年の落成時の奉祈産婦安全木札の現物を写真に収めることができた。

さらに、平成30年2月13日に、A614・615演習室で行った、公開研究会では、須藤教授から「四国大学附属図書館所蔵「凌霄文庫」の賀川流産科関係資料の紹介」をうけ、資料の閲覧と意見交換を行った。内容1. 四国大学附属図書館「凌霄文庫」に蔵書の医療関係史料：賀川に関する江戸時代の書物を中心に資料の解説 2. 図書展示コーナーにおける公開閲覧：賀川流に関する史料と関係が深い上田竹雄（産婆）に関する研究資料 徳島の産婆の歴史・・・自宅分娩に使用した訪問靴を提示した。

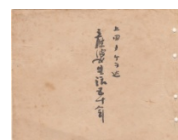
学生のレポート

公開研究会では、須藤教授から「四国大学附属図書館所蔵「凌霄文庫」の賀川流産科関係資料の紹介」をうけ、資料の閲覧と意見交換を行った。大学院生は、自己の研究対象は現代の母子や臨床看護師のため近年の文献検索に偏りがちであるが、歴史文献の上に今があること、古書を紐得事の意義がわかり興味深かったと、述べている。



学外協力者レポート

上田タケヲの孫より聞き取り調査を行い、一次資料【上田竹雄の肖像画布制、冊子：上田タケヲ述産婆生活五十年、タケヲ及び家族写真】を収集、インタビューにて孫の立場からとらえるタケヲの存在や徳島県に開業している賀川の子孫の存在を知る。二次資料【湖国の医史―先人たちの活躍を知る、2008年】を収集した。



上田竹雄(1833-1907) 上田タケヲ(1872-1963)

活動成果

「徳島の近代産婆の活動分析によるあらたな開業助産師モデル開発と教育内容への反映」に関わる初年度調査として、1.上田タケヲの孫である上田博章宅を訪問し、上田タケヲの人物像や産婆二代記を出版に至った状況、孫の立場から見る上田タケヲの人物像、語り聞いた上田竹雄の存在や、賀川流産科との関わりについて聴き取る。2.明治・大正時代に子どもを島全体で大切に育てる地域風土が存在した伊吹産院の跡地、民俗資料館を調査し、自宅で出産を終えた母子が、出部屋に移動し約1カ月の間別火で過ごした、当時の状況について、昭和58年解体前の写真と跡地から状況を知ることができた。また、伊吹島民俗資料館に残る、伊吹産院の全景、産褥婦の語らい、布団干し等の日常生活、沐浴、新生児の【船】「乗り始め祈願」等の様子、また、昭和5年の落成時の奉祈産婦安全木札の現物を写真に収めることができた。

課題及び今後の展望

今までの調査で、徳島県の近代産婆の始まりは、明治2年(1869)藩命をうけ、33歳で徳島藩ご用達産婆となり、男装して徳島城鷲の門を通った産婆登録第1号の「上田竹雄」の存在はわかったが、産婆育成の過程は明確にされていない。

昭和20年の空爆により、教育に関わる資料が消失しているが、戦火を免れ徳島県に残る法令集、県史、町史、医師会史、新聞等から保健医療に寄与した医師・産婆・鍼灸治等の変遷と人口動態の関係など社会状況と併せて分析することで、地方における助産師の近代化への道のりを明かにできる。

活動テーマ

課題探求ゼミナールにおける地域貢献力向上のための教育的支援方法開発プロジェクト

活動の概要

看護学科3年次の課題探求ゼミナールにおいて、学生の看護研究方法実践力の獲得及び職業人としての意識を高めるため、地域教育的要素を導入した教育方法の開発を目指したプロジェクトである。

代表者名：武田道子（看護学部看護学科 教授）

活動メンバー：（看護学部看護学科）

（教授）高橋順子、（教授）高山直子、（教授）小川佳代、（教授）橋本茂、
（准教授）藤代知美、（講師）佐藤千津代

連携協力先：徳島県医療政策課、徳島保健所、徳島市子育て支援ネットワーク、
大塚国際美術館、四国霊場13番から17番札所、なのはな徳島、
地域活動支援センター あわっこ等

活動期間／スケジュール

平成29年4月	各施設との事前打ち合わせ
4月～7月	ゼミナール15回（うち各ゼミごとの現地調査1-2回）
8月～9月	まとめと報告



実施した活動内容

プロジェクトメンバーである看護学部教員の研究分野の主な課題を出し、その課題に興味を持った3年次の学生が6-7名のグループを構成し、少人数のゼミナールを担当した。科目の到達目標は、学生の地域人としての人間的な成長や自己啓発力を育成し、4年次の看護研究に継続発展していくとした。

ゼミナールの内容として、県内の施設見学、現地調査、現地対象者へのインタビューなど地域や地域住民と触れ合う学外学習を取り入れ、事前学習、事後学習で徳島県の課題やその課題に対する対策をメンバー間で検討し、結果の一部を現地へ報告した。

取り上げた
徳島県の課題

「災害時要支援者」「育児支援」「生活習慣病予防」「遍路文化と接待」「絵画に学ぶ健康」「在宅精神障害者」「発達障害児」



学生のリポート

各ゼミナール毎、徳島県の課題と学生ができる対策を検討した

○「災害時要支援者」について

南海トラフ地震発生が予測されていることから、多くの高齢者が避難所で生活不活発病になるなどの問題が生じる恐れがあるという課題がある。災害についての知識を広め、防災訓練等で住民の防災意識を高めることに取り組めそうである。

○「育児支援」について

必要なサービスを利用できていない親子がいる、子育て支援の場へ行くとき駐車場がない等の課題がある。取り組めそうなことは、親子参加教室の計画、親子体操の提案等である。

○「遍路文化と接待」について

遍路の健康課題として、脱水熱中症がある。取り組めそうなこととしてはお遍路さんを見かけたら、健康観察や救急セットを渡すなどのお接待をすることである。

○「生活習慣病予防」について

県民は歩数の少なさから運動不足、野菜摂取不足、肥満、COPD等の課題がある。取り組めることは、周囲の学生や家族に健康講座の周知や禁煙の周知をすることである。

○「絵画に学ぶ健康」について

絵画を見て画家の精神的な面の理解が進むとともに精神障害に対する偏見があると学んだ。精神障害への偏見をなくす取り組みができると思った。

○「発達障害児」について

発達障害のある児の受け入れ施設の少なさ、支援体制が整備されていない課題がある。発達障害のある児の周囲の理解を促したり、接し方の普及などの取り組みができる。

○「在宅精神障害者」について

精神障害者が南海トラフ地震の被災者となった時の薬の継続服用の支援などの対策が進んでいない課題があった。障害者が持つヘルプカードを考案作成し、印刷配布した。

活動成果

・地域教育的要素を導入した教育方法の開発を目指すプロジェクトの結果、実際の地域の現場を見たり、地域で活躍する人の話を聞く機会を得て、地域に根差した看護研究の課題を深めたり、研究プロセスを進める経験ができた。

・看護職能として、地域の課題を知り、地域に役立ちたいと思う専門職業人としての意欲がさらに高まり、知りえた課題に関する情報発信等地域に役立つための方法を考案することができた。



課題及び今後の展望

・今後は、知り得た徳島県の地域課題に関する情報発信等地域に役立つための方法を学生が実践・模索することをサポートしていく。

・学習効果のさらなる向上を狙い、研究方法実践力の獲得及び職業人としての意識を高める地域教育的要素を導入した教育方法の開発を目指すよう計画したい。



活動テーマ

大学の学習環境を活用した訪問看護技術研修の実践と評価

活動の概要

医療機器機材を備えた大学の学習環境を活用し、地域の訪問看護師とケアマネジャーに対し新しい知識と技術研修を実施し、教育支援を行った。同時に、学生も参加し、実践レベルの技術を学ぶことで卒後の臨床実践とのギャップを縮めることを目的とした。

代表者名：佐藤千津代（看護学部看護学科 講師）

活動メンバー：渡部光恵（看護学部看護学科 助教）、看護学部4年次生4名、地域の医師、看護師、薬剤師、医療機器会社

連携先名：かさまつ在宅クリニック、テルモ株式会社、ニプロ株式会社、北常三島薬局

実施場所：四国大学看護学部地域在宅演習室

活動期間／スケジュール

平成 29 年 4 月 ～ 29 年 7 月 事前調査

平成 29 年 6 月 7 月 8 月 打合せ

平成 29 年 8 月 19 日 実施

実施した活動内容

看護に関する新しい知識や技術の研修は首都圏で行われることが多く、地方都市の訪問看護師やケアマネジャーは時間的にも距離的にも教育研修を受講することが困難である。そこで、大学には優れた医療機器機材があり演習室もある。この学習環境を地域に開放し訪問看護師やケアマネジャーの教育研修に活用したいと考えた。平成26年度よりCOCや勇美財団の助成を受け毎年実施してきている。H29年度にも計画し実施・評価した。研修には4年次生も参加させ、臨床実践とのギャップを少しでも解消することを目的とした。受講者18名学生4名

H29年8月19日

「疼痛管理」

講義・・・講師 笠松哲司医師

- ・疼痛時に使用薬品
- ・疼痛時の対応
- ・麻薬の副作用
- ・患者指導

講義・・・講師 伊勢佐百合薬剤師

- ・麻薬の管理方法、
- ・薬剤師との連携方法
- ・患者指導

「ターミナルケア」

講義・・・講師 長谷康子看護師

- ・死にゆく人への理解と看護
- ・技術や看護師の姿勢について

「演習」：輸液ポンプの使用方法



学生のリポート

在学中に実践看護師と共に学ぶことについて	感想、学んだこと
大学の授業では学べない実際の現場の利用者の声、訪問看護師の学びを知ることができた。就職後の看護について目標となる良い学びができた。	実際の現場での問題や対応の仕方、他職種の役割を知ることができた。研修の場を設けることで利用者に対する最善の対応ができるようになっていくのではないかと感じた。
実践現場のことについて学ぶよい経験となった。普段共に学ぶ機会がないので、看護師がどのようなことに着目した質問をしているかについて興味深かった。	医療機器の取り扱いについて、医師や薬剤師など他職種と共に確認すること、機械の機能に頼るのではなく、自分自身で確認することの重要性を学んだ。
内容が難しかったが、アセスメントの視点や薬剤の副作用について学ぶことができて良かった。	疼痛管理について学べた。在宅特有の医療機器に実際に触れることアセスメントすべきこと副作用等がよく学べた。
実践看護師の現場の経験に基づく意見や質問を聞くことができ良い経験となった。学内の授業だけでは聞くことのできない現場スタッフの意見は興味深かった。	鎮痛薬の使用による疼痛コントロールの必要性が理解できた。疼痛のケアには、薬剤だけでなく看護師による声かけ、訪問時の工夫、傾聴、受容、が大切であると感じた。医療機器メーカーも療養者の生活をよりよくしようという思いを持っていると感じた。

学外協力者リポート

- ・細部にわたり丁寧な対応であった。少人数であったため演習では十分に医療機器に触れることができて良かった
- ・病院でのキャリアが長くても在宅は全く違うので基本から学べる場を今後も提供してほしい
- ・在宅医療、疼痛管理について学ぶことができた。医療連携に役立てたい。
- ・専門的でわからないこともあったが参考になった。
- ・ターミナルケア、疼痛緩和について知識を得ることができた。医療系サービスを必要とする利用者が増えているため今後活かしたい。
- ・良い学びを得ることができた。
- ・疼痛管理について学ぶことはできたが専門的で理解しづらかった。ケアマネと訪問看護の連携についてもっと学びたかった。

活動成果

当日の受講者は18名で、その内14名から質問紙調査の回答を得た。14名の内、研修内容に満足したと答えた者13名であった。今後も参加したいと答えた者が13名、演習と講義の時間配分もよく、研修の進め方もスムーズであったと14名から回答を得られ、高い評価を得た。

3か月後には、研修が実践に役立っているかどうか質問紙調査を実施した。その結果12名から回答を得、技術を実践できる機会があるという8名は役立っているという回答があった。実践できる機会はないが、研修講師と面識ができ、患者のことで相談ができたり、訪問依頼ができたりと顔の見える関係を築くことにも役立ったことが示された。

課題及び今後の展望

課題

対象者へのアナウンス方法を検討すべきである。100あまりの施設に研修案内を郵送したが参加者は18名であった。演習室も最大で20名程度しか入れないが、もっと受講者を増やせるとよい。

今後の展望

現任看護師だけではなく、潜在看護師にも活用してもらえるとよい研修であることから、対象者を広範囲に募集したいと考えている。国は地域包括ケアシステムの中で、団塊の世代がすべて75歳以上になる2025年までには訪問看護師を現在の3万人から10万人に増やしたいと考えている。このような研修に学生を参加させることで、将来訪問看護師を目指す学生を増やしていけると考えられる。

活動テーマ

プレコンセプションケア IN 徳島 ～これから妊娠を考える人たちへ～

活動の概要

近年プレコンセプションケア(受胎前教育)は、健康な妊娠生活、健康な児の出産、思いがけない妊娠や中絶の回避などの効果があるとされ、アメリカ疾病管理予防センター(CDC)や世界保健機関(WHO)によって推奨されている。今回大学において実施している、プレコンセプションケアの効果を明らかにすることを目的として本研究を実施した。

代表者名： 永吉 円 (看護学部看護学科 講師)

実施場所： 四国大学

活動期間／スケジュール

第1回講座の実施	2017年8月2日(水)	15:15～16:45
第2回講座の実施	2017年8月9日(水)	15:15～16:45
第3回講座の実施	2017年8月23日(水)	15:15～16:45
第4回講座の実施	2017年8月30日(水)	15:15～16:45

実施した活動内容

・2017年7月、大学で一般・学生を対象に公募を行い、プレコンセプションケア講座を実施した。対象者は10～30代の受講者とし、計18名の参加者であった。(第3回は参加者が少なく今回の分析からは除外した。)

講義の流れと内容 について

第1回 8月2日(水) 15:15～16:45	1) 自分の体を知ろう！ 2) 性行為感染症について 3) タバコの害を知ろう！ 4) 有害な物質を避けよう！
第2回 8月9日(水) 15:15～16:45	1) 妊娠前の体づくりについて ①適切なエネルギー・バランス・葉酸の接種 ②適切な体重管理 2) 糖尿病・妊娠糖尿病について
第3回 8月23日(水) 15:15～16:45	1) ワクチン接種によって防ぐことができる病気 2) ワークライフバランスについて 3) 妊娠・出産・育児に関連した社会保障制度 4) 自分自身や子どもを暴力から守ろう！
第4回 8月30日(水) 15:15～16:45	1) 将来の妊娠・出産をライフプランとして考えてみよう ①受胎能力 ②家族計画・避妊法 2) 不妊症について 3) 助産師という仕事

アンケート内容

<講座内容の理解度 項目>13項目

各回の講座の内容の項目を、その講座の前・後で調査
【自分・家族の病気についての理解】・
【性行為感染症】・【性行為感染症の予防方法】・
【産後ケアの必要性について】・【タバコの妊娠・胎児への影響】・
【アルコールや有害な物質の胎児への影響】・【妊娠前の食事・栄養】・
【葉酸の摂取の必要性】・【妊娠前の適切な体重コントロール】・
【糖代謝異常】・【受胎能力について】・【家族計画・避妊法について】・
【不妊症について】

<将来の妊娠に関する自分の意識への変化 項目>2項目

毎回の講座の前・後で調査
【妊娠する前の自分の健康への意識】
【将来の妊娠・出産への程度具体的に考えられているか】

結果① 1回目講義アンケート結果

1.持病や家族の病気	n=13	前	後	P値	受講後すべての項目において理解度：有意に上昇
2.性行為感染症		6.4	8.2	0.0017	
3.性行為感染症の予防		6.8	8.6	0.0018	
4.産後ケアの必要性		6.8	8.7	0.0016	
5.タバコの害		6.3	8.2	0.0000	
6.アルコールなどの胎児への影響		7.4	8.8	0.0001	
		6.5	8.6	0.0006	
a.妊娠する前の自分の健康への意識	n=13	前	後	P値	受講後将来の妊娠に関する自分への意識：有意に上昇
b.将来妊娠・出産への程度具体的に考えられているか		6.2	8.5	0.0055	
		4.5	6.2	0.0004	

結果② 2回目講義アンケート結果

7.妊娠前の食事・栄養バランス	n=9	前	後	P値	受講後すべての項目において理解度：有意に上昇
8.葉酸摂取の必要性		5.3	8.1	0.0007	
9.妊娠前の適切な体重コントロール		4.0	7.9	0.0041	
10.糖代謝異常が胎児に与える影響		5.9	9	0.0028	
		5.1	8.6	0.0009	
a.妊娠する前の自分の健康への意識	n=9	前	後	P値	受講後将来の妊娠に関する自分への意識：有意に上昇
b.将来妊娠・出産への程度具体的に考えられているか		4.3	7.9	0.0002	
		4.7	6.1	0.005	

結果③ 4回目講義アンケート結果

14.受胎能力について	n=6	前	後	P値	受講後すべての項目において理解度：有意に上昇
15.家族計画・避妊法について		5.8	8.3	0.0256	
16.不妊症について		7.0	9.1	0.0269	
		5.2	8.7	0.0269	
a.妊娠する前の自分の健康への意識	n=6	前	後	P値	受講後将来の妊娠に関する自分への意識：有意に上昇
b.将来妊娠・出産への程度具体的に考えられているか		7.5	9.3	0.0256	
		7.7	9.3	0.0340	

課題及び今後の展望

今後対象者を増やし研究を進めると共に、今回の研究の結果をふまえ、地域の方々へのプレコンセプションケアを実施することで、徳島の方々の健康へ貢献していきたい。

活動テーマ

防災意識の高い看護学生を育成するための検討

活動の概要

防災訓練の活動実施を通じた参加後の大学生の大地震に対する防災意識と備え行動の意識の変化を明らかにし、地域連携した防災教育の示唆を得ることである。

代表者 : 看護学部看護学科 助教 久保幸子

共同活動者: 看護学部看護学科 教授 武田道子 看護学部看護学科 准教授 富澤栄子

活動協力者: 文学部国際文化学科 フェネリー・マーク

活動期間／スケジュール

2017年10月初旬

実施した活動内容

活動方法

対象者はA大学の学生87人で調査時期は、2017年10月初旬であった。方法は、大学周辺の地域連携した防災訓練に地域住民及び学生が参加した。防災訓練の内容は、地域住民と共に津波避難ビル前から3階に避難した後、クロスロード等の防災訓練を実施した。

調査方法

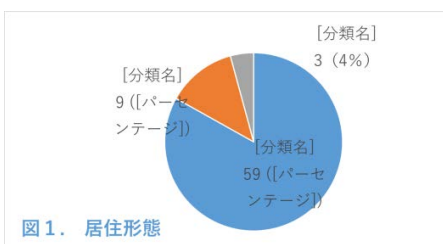
回収箱を設置し、参加前後で自記式質問紙集合調査をした。調査内容は、基本属性と大地震の発生想定、自分自身の被害想定、大地震に対する備え(表1)大学での防災訓練の必要性、災害時の地域連携の必要性等とした。大地震に対する備えは、東京消防庁の備え10か条を用いて、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の(4件法)で回答を求め、大学での防災訓練の必要性及び大学と地域連携の必要性等を「強くそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「思わない」の4件法で回答を依頼した。分析方法は、防災訓練前後で4段階で得点化し、備えの程度と意識をWilcoxonの検定で比較した。解析にはSPSS Statistics Ver20を用いた。

表1. 大地震に対する備え

大地震に対する備え

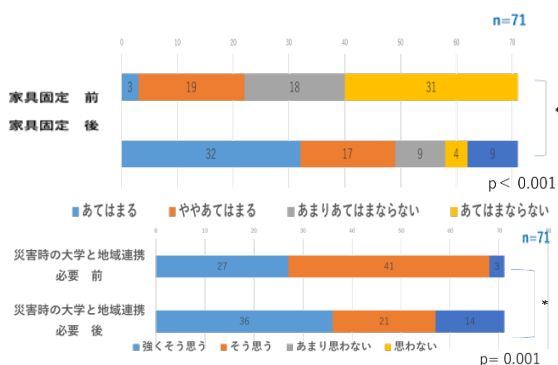
1. けがをしないように家具を固定している
2. 散乱物でけがをしないように枕元にはスニーカー等を準備して寝ている
3. 停電に備えて、懐中電灯をすぐ使える場所に置いている
4. 火災の発生に備えて、消火器の準備をしている
5. 普段使用しない電気器具は、差込プラグから抜いている
6. 3日分の水と食料を用意している
7. 非常用袋は、置く場所を決めて準備している
8. 家族で安否確認の方法を決めている
9. 自治体の防災マップ等で、自分の住む地域の危険度を確認している
10. 新聞、テレビ、インターネット等から防災に関する情報を収集している

活動成果



今後30年以内の居住地における大地震の発生想定は、71人中65人(91.8%)が今後30年以内に居住地で大地震が発生すると想定していた(図2)。

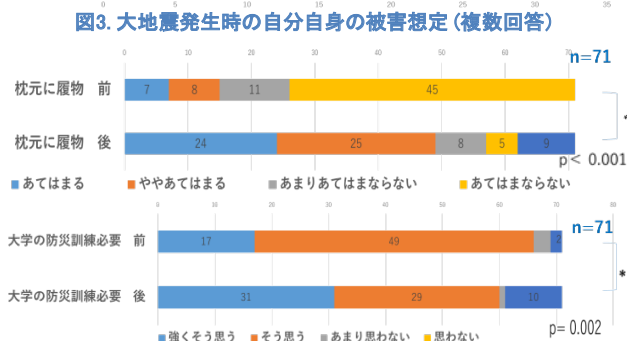
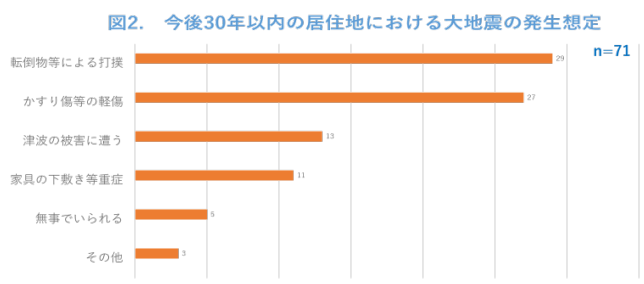
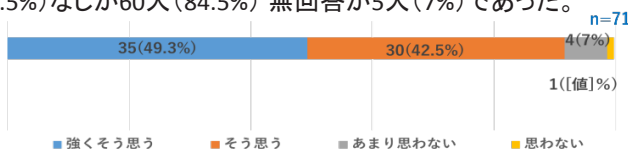
大地震が発生したときの自分自身の被害想定は、家具の転倒等による打撲29人(40.8%)かすり傷程度の軽傷27人(38.0%)家具の下敷き等重症11人(15.5%)の順に多く、無事でいられると回答した学生は、5人(7%)であった(図3)。



分析対象者は71人(女性60人, 男性10人, 無回答1人)で、回収率は81.6%であった。1年生50人(70.4%)2年生12人(16.9%)3年生6人(8.5%)4年生2人(2.8%)無回答1人(1.4%)であった。

居住形態は、寮が59人(83%) 自宅が9人(13%) 学生アパートが3人(4%)であった(図1)。

被災経験は、ありが6人(8.5%)なしが62人(87.3%)無回答が3人(4.2%)であった。災害ボランティア経験は、ありが6人(8.5%)なしが60人(84.5%) 無回答が5人(7%)であった。



・大地震の備えに対する意識10項目のうち、防災訓練前後で「家具の固定」「枕元に履物を置く」「懐中電灯の準備」「消火器の準備」「3日分の水と食料の準備」「使用しない電気器具のプラグを抜く」「家族で安否確認方法を定める」「防災情報の収集」の8項目で有意差が認められた(有意水準5%)。また、大学での防災訓練の必要性や災害時の地域連携に対する意識においても防災訓練前後で有意差が認められた(図4)。

・家具の転倒と建物倒壊による圧死が阪神淡路大震災において77%を占めていたことから、備えにおいて家具の固定は重要であるといわれている。災害時を想定する訓練をしたことにより、「家具の固定」の備えの意識においても変化が認められたと考えられた。

・災害時における大学と地域連携の必要性を「強くそう思う」学生が防災訓練前後で、38%から50.1%に増加していた。

【まとめ】

・防災訓練後は1日の半日を過ごす大学で被災することを想定し、大学における防災訓練の必要性が再認識されたことが示唆された。防災訓練が地域住民の指定避難場所である津波避難ビルで開催されたこと、地域住民と共に参加したことにより、大学生は地域連携の重要性を学んだと考えられた。

課題及び今後の展望

- ・看護学生の参加が少なかったため、看護学生の防災教育の内容を検討する必要がある。
- ・地域連携の防災訓練は、休日に開催されたため、自宅生や学生アパートに住む学生の防災訓練参加率が低かった。全学生が参加しやすい日時を設定する必要がある。防災力向上のために、大学と地域が連携した実効性のある防災教育や防災研究を継続することが重要である。

活動テーマ

学生の書道の力を地域活性化に活用する研究

活動の概要

地域の各種イベントなどの際に、学生の書道技術を生かした作品制作や作品展示を用いて、学生自身が地域住民と交流しながら参加し、学生の就業力を育成すると同時に、地域活性化に協力し、多くの人々に書道文化の魅力を伝えるための、より良い方法を模索する。

代表者名：太田 剛（文学部、書道文化学科、教授）

活動メンバー：蓑毛政雄、辻 尚子（文学部、書道文化学科、教授）

連携先名：徳島市両国本町商店街、美馬市、スカイピア、勝浦町、風の駅さかもと

実施場所：徳島市両国本町、美馬市脇町、勝浦町

活動期間／スケジュール

平成29年7月・・・徳島市両国商店街でのバナー作品制作

平成29年7月・・・スカイピアに飾る作品制作、ポスター制作

平成29年9月・・・美馬市脇町小星地区スカイピアでの書道展開催

平成29年12月・・・美馬市脇町での「うだつをいける」看板制作

平成30年2月・・・美馬市脇町の吉田家住宅での書道コーナー設営

平成30年1月・・・勝浦町の「ひな祭り書道展」の作品制作

平成30年2～4月・・・勝浦町の3ヶ所にて「ひな祭り書道展」開催

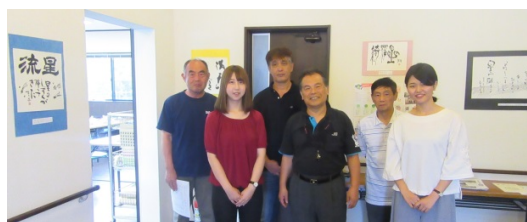
平成30年3月・・・勝浦町の2ヶ所にて書道コーナー設営

実施した活動内容

①徳島市両国商店街でのバナー作品展示



②美馬市脇町スカイピアでの作品展示



③美馬市脇町吉田家住宅での看板展示



④勝浦町「ひな祭り書道展」の開催と書道コーナー開設



学生のリポート

4年生 玉城千博 : すべての事業に参加

私は「うだつをいける」の看板制作に携わり、書道表現の魅力を改めて実感しました。また様々なイベントで作品制作をする中で、文化としての書道の必要性を感じ、また地域の人たちとの交流を通して、徳島の魅力を感じることが出来ました。



4年生 星川遙香 : 多くの事業に参加

私は徳島市両国商店街のバナー作品や、書道展での作品制作に携わり、自分の作品が町やお店に展示されることで、地域の人たちとの関わりを持つことができ、書の力を感じることができました。



学外協力者リポート

美馬市脇町小星地区「小星ファンクラブ」代表 中妻淳一さん:

美馬市脇町スカイピアの書展には、遠方からも多くの皆さんが見に来て下さいました。関係者の支援と、四国大学の太田先生や学生さんの尽力が地域を元気に、希望に繋げてくれています。皆さんに感謝です。

勝浦町坂本のカフェ「風の駅さかもと」経営者 鴻本浩さん:

田舎のカフェに、学生さんのすばらしい作品を見に、遠方からわざわざ来て下さるお客さんが増えました。また、この地域に高尚な文化的香りを醸し出してくれて、感謝しています。活性化に大きく役立っています。

活動成果

1. 展示された書道作品が注目されて、マスコミでも紹介され、客の関心が高まり、地域活性化に協力できた。
2. 参加学生たちの書道の表現力が高まると共に、住民と交流するためのコミュニケーション能力や自信もついてきた。
3. 住民の中に、書道や四国大学への関心が高まり、良いイメージを持ていただくことができた。

課題及び今後の展望

1. 大学の従来の仕事が多忙な時期に地域活動が重なると、教員の仕事量が増えて対応に苦慮した。可能な分はさらに学生に任せていくことで、学生の経験の機会も増やしていきたい。
2. これまでも長い期間、共同で研究を続けてきた機関がいくつかあるので、改めて「共同研究契約」を結ぶと共に、今後は印刷会社や看板会社などと事業提携する方法も模索していきたい。

活動テーマ

過疎地域における次世代の医療・福祉を担う人材育成
－看護学部生によるキッズナースの育成とその効果－

活動の概要

本活動は、地域医療施設と共同で次世代(小学生)に地域社会や職業に対する興味関心を持ってもらい、特に、将来地域医療福祉を担う人材として育つことを支援することを通して、地域活性化を図るものである。合わせて当学部生が看護職としての魅力を伝えることによって、学生自身が自分の役割を認識し、職業人としての自覚を促すことを目指している。

本事業を開始して今年度は3年目に当たり、徳島県西部(つるぎ町、美馬市)地区を対象としてつるぎ町立半田病院と協働した。また、勝浦町・上勝町地区を対象として、行政と協働したキッズナース事業を実施した。

代表者名 : 橋本 茂 (看護学科教授)
活動メンバー: 小川 佳代(看護学科教授)
中澤 京子, 江口 美希, 横関 恵美子, 長尾 多美子
四国大学看護学部生 2年次生, 3年次生, 4年次生
連携先名 : つるぎ町立半田病院, 長尾春美看護部長他看護師
: 勝浦町役場職員

活動期間／スケジュール

平成29年9月～	県西部地区キッズナース事業実施計画作成及び打ち合わせ
平成29年9月10日	美馬市、つるぎ町対象のキッズナース事業実施① AM四国大学 PMつるぎ町立半田病院で体験
平成29年12月～	県央中山間部キッズナース事業実施計画作成及び打ち合わせ
平成30年2月25日	勝浦町・上勝町対象のキッズナース事業実施② 1日四国大学で体験

実施した活動内容

※キッズナース事業とは、
当学看護学部が、地域の中核病院と連携し、中核病院近辺の小学生を対象として本学に招き、看護学部生によるキッズナース授業を実施した。その後、地域の中核病院を医療者の立場から見学していただき医療・看護に興味を持っていただく。このプロセスの中で将来、地域で医療福祉に貢献できる人材の育成および地域の医療福祉は地元の人材で賄う、つまり人材の循環を目指す事業である。



実施した活動内容

【目的】地域のキッズ(小学5～6年生)に看護師(キッズナース)を体験していただく
地域の医療・保健・福祉に関心を持っていただく

【活動①】美馬・つるぎ地区

対象:小学生15名、保護者12名、病院職員

本学 2年生4名・3年生8名・4年生4名、教員4名

方法:1.大学で模擬授業を体験する.

2.看護の立場から病院見学を実施する(半田病院看護師)

3.半田病院看護師、四国大学看護学部生・教員との交流会

大学での体験

オリエンテーション



②バイタルサイン測定

・体温、脈拍、血圧測定を行う



④手洗い体験

・自分で手洗いを行い、その後
グリッターバグを使用して測定



⑤赤ちゃんの着替え ・赤ちゃんモデル を使用して着替えの体験

①模擬授業(こころはどこにあるの?)



③聴診器を使用した体験

・モデルの人形を使用して呼吸の音や
心臓の音等を聴く



実施した活動内容

意見交換：小学生と学生との交流会



つるぎ町立半田病院 病院内見学と看護師の仕事見学 ①内視鏡室の様子



②手術室の様子



電気メスを使ってみよう



③看護師さんたちと集合写真を撮りました



実施した活動内容

【活動②】勝浦町・上勝町地区

対象：小学生3名、中学生6名 保護者8名、勝浦町職員2名

本学 2年生4名・3年生8名・4年生4名、教員4名

方法：1.大学で模擬授業を体験

①模擬授業

(なぜコミュニケーションは必要なの?)

②手洗い体験



③バイタルサインの測定



④赤ちゃんの抱っこ



⑤高齢者体験



⑥学生との交流



学生のリポート

学んだ看護の知識や技術を中学生や小学生に伝えることで看護の学修に対するモチベーションがあがった。「将来一緒に仕事ができたらいいね」「看護師はいいよ」等と子どもたちに声をかけていた。住民の方や保護者の方から直接話をお聞きすることで、地域の現状と将来の地域にとって何が必要か考えることができた。

参加者のリポート

- 参加した理由
 - ・小学生：看護師に興味があった。楽しそうと思った。
 - ・中学生：看護師を目指す人に興味があった。
 - ・保護者：色々な体験をさせたかった。
- 楽しかった体験
 - ・赤ちゃんの着替え、包帯を巻くことなど。
- 難しかったこと
 - ・バイタルサインの測定、赤ちゃんの着替えなど。
- 驚いたこと
 - ・手洗いの時の菌の量、エプロンやマスクのつけ方、高齢者体験のページのめくり方など。
- 保護者の感想
 - ・子どもがその気になりうれしかった。
 - ・大学の雰囲気を楽しめてよかった。
 - ・学生とずっと話しができればよかった。など

活動成果

- ・本学看護学生が既習の看護学を小中学生に伝えることで、看護職者になることについてモチベーションが向上した。
- ・また、地域創生事業について住民から直接話を聞き、地域完結型医療におけるCOC事業の目的の理解が深まった。
- ・勝浦町においては予算処置を講じていただいたこともあり、実施についての連携ができた。
- ・参加してくださった保護者から「看護師に興味を持ってくれてうれしい」という感想があり、医療・福祉を担う次世代の人材育成の目的は達成しつつある。同時に、大学に対する要望も具体的に語ってくださったので、今後の課題が明確になった。

課題及び今後の展望

- ・参加者の評価は高いが、現在の実施方法では移動費が高額で継続が困難である。対策として、サテライトオフィスをキャンパスとして活用するか、大学と地域病院での事業を別日開催とする、行政に働きかけキッズナース事業を売り込む等の検討が必要である。
- ・カリキュラム化には、解決しなければならない課題が多い。単年度生全員が参加するには事業規模が小さくて実施が難しい。

活動テーマ

寺院文化財調査研究スタッフの調査技能の定着に関する試行

活動の概要

寺院に収蔵されている絵画・典籍・古文書などの多くの文化財の調査を通じて、新たな地域研究の提供を行うと同時に、学生の文化財調査研究技術の習得を目的とする。

代表者名：須藤茂樹（文学部 日本文学科 教授）

活動メンバー：會田 実（文学部 日本文学科 教授）

立井佑佳（大学院 文学研究科1年生）

阿部愛未・四宮朋佳（日本文学科4年生）

結城千鶴・岡本晴香・米田弥生・岡本陽和・七條友香・長宗映見・中村しずく

服部愛弓・甘利明日香（日本文学科3年生）

山口幸歩・山田祥子・江口優奈（日本文学部2年生）

連携先名：蓮光寺（石井町）

実施場所：蓮光寺（石井町）

活動期間／スケジュール

平成29年	12月 9日（土）	蓮光寺文化財調査実施
平成29年	12月25日（月）	蓮光寺文化財調査実施
平成30年	1月12日（金）	蓮光寺文化財調査実施
平成30年	2月14日（水）	蓮光寺文化財調査実施
平成30年	2月20日（火）	徳島県立文書館にて資料調査実施
平成30年	2月22日（木）	蓮光寺文化財調査実施
平成30年	3月14日（水）	蓮光寺文化財調査実施

実施した活動内容

平成29年12月から平成30年3月にかけて、石井町の蓮光寺にて所蔵の文化財調査を実施した。なお、当初は徳島市勢見の観音寺、石井町の童学寺を予定していたが、童学寺本堂が焼失したため、急遽同町の蓮光寺に変更をした。

また、調査候補であった観音寺は事前調査で活動が終了したため、平成29年度においては蓮光寺を主たる調査対象とした。

活動期間中において計6回蓮光寺を訪問し、客殿を使用して伝来の典籍調査を行った。蓮光寺に所蔵されていた未調査の典籍を整理し、文献調査カード記入を行った。これらの記録を今後の調査資料として利用するために整理した。

また、蓮光寺調査に関連しては現地での活動に加えて、徳島県立文書館にて調査対象の典籍及び古文書の収録内容に関する関係資料の調査を行った。

学生のレポート

立井佑佳：大学院文学研究科1年 大学2年生から4年生まで毎年参加して、資料調査の大切さを学びました。もっと勉強したいので大学院に進学しました。学部生時代に学んだ調査技法が現在大変役立っています。

山口幸歩：日本文学科2年 先輩に誘われ参加しました。古文書を読むのは大変ですが、読めるとうれしいです。少しでも読めるようになりたいです。



活動成果

悉皆調査という手法を用いて文化財を発見することで、新たな研究及び教育材料の提供を行うと同時に、地域活性化の可能性の高い素材を見つけ出すことができた。

また、古文書・典籍類の原本を用いて本格的な歴史研究の調査方法の基礎を学生たちが習得することができた。

参加学生は、みな博物館学芸員資格取得を目指す者であり、博物館学芸員としての実務を学ぶことになった。

今年の調査により、全体の4割程度の文献資料調査カード作成と封筒挿入などの整理が終わった。

課題及び今後の展望

今回の調査により、収蔵文化財全体の4割程度の文献資料カード作成と封筒挿入などの整理が終わった。

また、地域活性化の可能性の高い素材を見出し、地域の歴史研究者や町おこし隊のメンバーとの連携を行い、地域の新たな研究及び教育資料として活用していく。

今回の調査は文化財研究における全体的な取り組みの一部であり、今後も継続調査が望まれる。

活動テーマ

地域の母子統合ケアを目指す助産師活動
「阿波コウノトリ塾」命の授業

活動の概要

子どもの命が尊重され一人の人として健やかに育つ社会を育成するために、周産期を取り巻く性と生殖に関わる倫理について学習し、また生命倫理をめぐる理論と家族看護学の理論を学び、親になる過程における心理的ストレスや社会との関係の課題を追及してきた。助産学生が「さん助産学」での学びを生かした社会貢献として「命の授業」を計画し佐那河内小学校で実施した。

代表者名：高橋順子（看護学部看護学科 教授）

活動メンバー：高田律美（看護学部看護学科准教授）、
重清 珠里・住友 瑞菜（看護学部、看護学研究科助産学分野1年次生）

実施場所：佐那河内小学校（徳島県名東郡佐那河内村下字中川原30）

活動期間／スケジュール

平成 30年10月 ～30年12月4回

事前調査と調整：佐那河内小学校校長・教頭・養護教諭

平成 30年12月10日 実施：佐那河内小学校3年～6年生小学生50名

授業参観者

小学校：校長、副校長、学年主任、学年担任、養護教諭、保健師、他：佐那河内の保健師、教育委員など 9名

報道：徳島新聞記者1名、市民病院広報 1名、授業補助者：徳島市民病院助産師1名

実施した活動内容

佐那河内小学校

授業日 平成30年12月10日(月)

対象 ①. 3.4年生24名：9：40～10：25 ②. 5.6年生26名：10：45～11：30

テーマ：カーモンベイベー！命の誕生について学ぼう（阿波コウノトリ塾：命の授業）

授業のねらい

- ①命のはじまりから胎児の成長過程と誕生の様子が理解できる
- ②様々な方の支援と思いの上に今の自分があることを感じる事ができる
- ③命の大切さについて考える機会とする

構成：命の始まりのおおきさ、受精卵の変化、胎児の成長と誕生についてスライドと胎児摸型で説明、小学生の参加のもと出産場面の実演、養護教諭の子どもへの思いをインタビュー、参加者全員による「命の木」の作成



学生のリポート

4月から準備して模擬講義を繰り返し、講義にのぞんだが、当日朝、インタビュー予定者のインフルエンザ発症により、急遽構成の変更となった。
臨床助産師の補助を受けながら乗り切ることができたが、色々なハプニングを想定して準備する必要性に気付いた。
講義全体を通して児童の反応はよく、目標は達成できた。いくつか想定外の児童の反応や行動に、うまく対処出来ず、模型が見えない児童や抱っこ体験に時間がかかり、準備物品は余分に持ってくる必要性を感じた。

学外協力者リポート

授業構成は小さな受精卵から始まり、だんだん大きくなっていく流れであったので解り易かった。
ハートの紙のような小さな穴からはじまり、赤ちゃんの成長がみえてわかり良かった。今回急な病気により赤ちゃん参加がなくなったが、実際のモデルの登場という構成は素晴らしい。
色々な場面を工夫されてた授業が3・4年生の児童を飽きさせない構成だと思います。
児童の小さなつぶやきも取り上げられていたので、子どもたちは、うれしかったと思います。出産シーンを見せて下さりよかった。



ミリ
・大きさは0.1~0.2mm

活動成果

助産学を構成している理論を学び、母子に関わる社会の課題を抽出し、実践したいテーマを性教育【命の授業】と決め、決定後は性教育の動向、対象児の特徴についての文献検索、小学校訪問、実施協力校の探索から実践に至る、準備・企画・実施・評価までの一連の過程を学修する事ができた。

課題及び今後の展望

命の授業の実施結果の分析. 1. 児童の授業感想から児童のうけとめかたや目標の達成を分析する。
2. 授業参観者の感想から授業を評価する。

活動テーマ

更年期女性の地域におけるヘルスケアの改善プログラムの実施

活動の概要

美馬市の4町(脇町・美馬町・穴吹町、小屋平)の更年期から老年期へ移行期の女性を対象に疾患予防にかかわる健康管理、健康増進を目的とし、アクションリサーチの手法で家庭で取り組める健康教室を実施し、その効果を検討した。

代表者名 : 高田律美 (看護学部 看護学科 准教授)
活動メンバー : 高橋順子 (看護学部 看護学科 教授)
新居アユ子 (同 助教) 湯浅貴実子 (同 助手)
研究協力者 : 岡 靖哲 (愛媛大学医学部 睡眠医療センター)
高橋秀樹 (京都大学大学院)
実施場所 : 美馬市地域交流センターミライズ, つるぎ町立半田病院

活動期間／スケジュール

更年期の女性講座として健康教室『大人の女性の健康プログラム』を開催した。更年期の女性特有の症状改善と家庭でも楽しんで行える内容とした。

平成30年12月22日 更年期の睡眠
平成31年 1月13日 東洋医学とお灸
1月24日 更年期のダンスセラピー
2月 2日 プラチナヨガ
2月 9日 更年期のアロマセラピー
3月 7日 更年期を豊かに過ごすために

実施した活動内容

①「更年期の睡眠」では、睡眠医療センターで勤務し、妊婦や子どもの睡眠にも携わる医師より、睡眠のメカニズムや更年期の睡眠障害などについての講演会を開催した。(参加者12名、学生1名)



講師との歓談の中、更年期に起こりやすい症状と不眠に関しての質問があった。
「これから、寝る前の長時間のスマホを避けます」など、日常生活の改善に結びつく示唆が得られたという意見や「毎日のことですが睡眠のしぐみが改めてよくわかりました」という意見が聞かれた。

②「東洋医学とお灸」では、妊婦や褥婦の鍼灸治療をされ、助産学分野の授業も担当されている鍼灸師より、東洋医学とお灸についての講演を実施後、各人自分にあったツボにお灸を据えるという体験をした。(参加者9名)



「昔は家で母や祖母もお灸をしていた」
「腰がらくになった」
「体がポカポカする」
「家で夫といっしょにお灸を据えてみる」
など体調の調整に東洋医学やお灸への取り入れに積極的な意見が聞かれた。

実施した活動内容

③「更年期ダンスセラピー」では海外でも活躍し、ダンスセラピーでの研究を推進中である日米認定ダンス/ムーブメント療法士の講師による講座を開催した。(参加者13名)

身体の動きに関する解剖や機能についてわかりやすく説明しながら、ストレッチから少し強めのダンスまで実施した。風船などを使い身体を動かすなど、自由な動きの体験もした。また参加者からの要望で、講師のダンスパフォーマンスの実演も行われた。

参加者は「体の動かし方で、膝や腰の痛みがなく動けることがわかりました」など日常生活の改善に結びつくことを実感されていた。「都会ではすぐに行ける施設もあるけれど、美馬地域で開催があることは嬉しい」という意見も聞かれた。



④「プラチナヨガ」では、助産師でマタニティーヨガを専門にされている講師の方から更年期＝プラチナ世代を対象としたヨガを開催した。(参加者13名、学生3名)



「骨密度など、体に影響する運動もあって面白かった」「リラックスできた」などの意見があり、終了後も講師の先生に呼吸法のコツを訪ねていた参加者もみられた。

初めてこのプログラムに参加する友人を誘って参加されたかたも多く、学生も交えてのヨガのクラスは和やかに終了した。



⑤「更年期のアロマセラピー」では助産学の教員であり、日本アロマセラピー学会の認定助産師が講師となった。一般の方にもわかりやすくアロマの講義をしたのち、アロマオイルのブレンド、エアーフレッシュナーの作成、アロマバスソルトの作成をした後、参加者同士でハンドマッサージを実施した。(参加者12名、学生5名)

今回は講座を2回以上受講されているリピーターの参加者ばかりであった。とても和やかな雰囲気の中で、「アロマを使っている人は周りにいるけれど、自分でどのように活用できるか知らなかったのでよかった」などの意見が聞かれた。事前にブレンドの方法やマッサージを経験していた学生もいたため、会の進行は円滑で、学生と共同したマッサージ体験は大変好評であった。



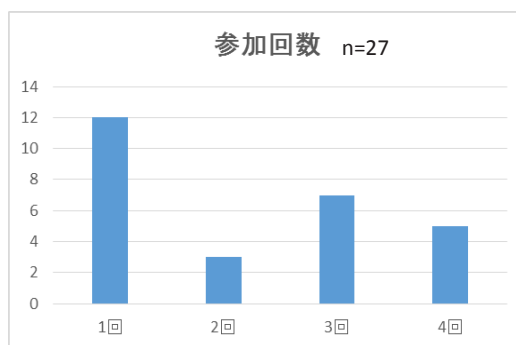
学生の感想

- ・更年期女性に睡眠について悩んでいる人が多いことに驚きました。太陽の光を浴びることの重要性は知っているけどやっていないことが多いので、自分でも実践してみようと思いました。
- ・睡眠は当たり前のことにおもうけれど、年齢を重ねるにつれて睡眠の悩みが出てきた時には受診を勧奨することも一つの方法であると、看護学生として学びました。
- ・ヨガをすることで体の調子を整えられることを学び、今後も自分でしてみようと思えるほど、よい体験をすることができました。
- ・アロママッサージを初めて経験し、リラックス効果や疲労回復への効果を実感できました。
- ・更年期の女性では様々な症状が出てくると思いますが、それを軽減させ、健康に生きられるよう、生活習慣を見直したり、アロマで癒される時間を作る大切さが分かりました。
- ・参加されている方の表情が来られた時よりも和らいでいるように見え、香りやマッサージ効果を実感できました。

実施した活動成果



とても満足～やや満足が70%、どちらでもないが5%という結果であった。



1回のみ参加が12人、複数回の参加が15名であった。

【参加者の声】

- ・(睡眠)寝る前にゲームをしないように気をつけます。
- ・東洋医学を受講後、ツボを意識して困った時に押している自分がいた。
- ・ダンスセラピーでは一つ一つの動きはとてもためになりました。思い出したら、実施しています。
- ・寝る前にヨガの呼吸法を意識してから寝るように心がけたい。
- ・肩が楽になったような気がします。毎日、かかとを下に降ろす運動を30回している。
- ・アロマは大変面白かった。
- ・和やかなムードで参加しやすい時間でした。時間は短かったですが、楽しく受けることができました。またこういう機会をして頂きたいです。
- ・自分一人だとなかなか実行できないが、こういう場があると楽しく出来るので続けて欲しいと思います。
- ・体に良い運動は情報が入るたびに夫婦で教えあって実行しています。

課題及び今後の展望

- ①平成31年3月7日 つるぎ町立半田病院にて産婦人科医師の沖津修先生を講師として「更年期を豊かに過ごすために」という演題で更年期女性にむけての講演を企画している。
- ②今後は更年期～老年期女性の身体的健康度、自律神経のデータ等、今回ご協力いただいた方のデータをもとにその効果を検証し、学会にて発表する予定であり、地域におけるヘルスケアの次のアクションリサーチを考えている。

活動テーマ

地域における次世代の医療を担う人材育成
－看護学部生によるキッズナース事業への参画の効果－

活動の概要

本活動は、地域医療施設と共同で次世代(小学生)に地域社会や職業に対する興味関心を持ってもらい、特に、将来地域医療を担う人材として育つことを支援することを通して、地域活性化を図るものである。合わせて当学部生が看護職としての魅力を伝えることによって、学生自身が自分の役割を認識し、職業人としての自覚を促すことを目指している。

本事業を開始して今年度は4年目に当たり、徳島県西部(つるぎ町、美馬市)地区を対象としてつるぎ町立半田病院と協働した。また、勝浦町・上勝町地区を対象として、行政と協働したキッズナース事業を実施した。

代表者名 : 小川 佳代 (看護学科教授)

活動メンバー: 富澤 栄子(看護学科准教授)

中澤 京子、横関 恵美子、長尾 多美子、吉村 尚美、渡部 光恵

四国大学看護学部生 2年次生、3年次生、4年次生

連携先名 : つるぎ町立半田病院、長尾春美看護部長他看護師

: 勝浦町役場職員

活動期間／スケジュール

平成30年6月～ 県西部地区キッズナース事業実施計画作成及び打ち合わせ

平成30年6月28日 美馬市対象のキッズナース事業 教育委員会 打ち合わせ

平成30年7月12日～つるぎ町立半田病院・勝浦町打ち合わせ

平成30年8月27日 勝浦町・上勝町対象のキッズナース事業実施

平成30年9月16日 つるぎ町立半田病院及び四国大学での体験事業

実施した活動内容

※キッズナース事業とは、
当学看護学部が、地域の中核病院と連携し、中核病院近辺の小学生を対象として本学に招き、看護学部生によるキッズナース授業を実施する。その後、地域の中核病院を医療者の立場から見学していただき医療・看護に興味を持っていただく。このプロセスの中で将来、地域で医療福祉に貢献できる人材の育成および地域の医療福祉は地元の人材で賄う、つまり人材の循環を目指す事業である。



キッズナース事業

看護を体験してみませんか。



学校名

名前

勝浦町
四国大学看護学部 共催



実施した活動内容

【半田病院及び本学でのキッズナース事業体験】

活動①: 美馬・つるぎ地区

対象: 小学生15名、保護者12名、病院職員

本学 2年生4名・3年生8名・4年生4名、教員4名

方法: 1. 大学で模擬授業を体験する。

2. 看護の立場から病院見学を実施する(半田病院看護師)

3. 半田病院看護師、四国大学看護学部生・教員との交流会

活動②: 勝浦町・上勝町地区

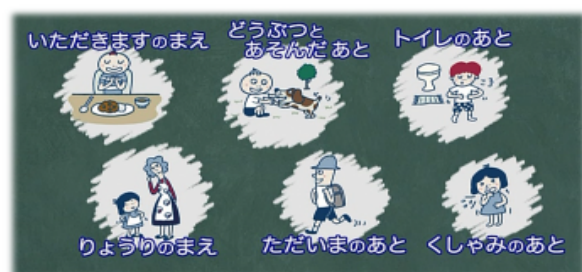
対象: 小学生3名、中学生6名 保護者8名、勝浦町職員2名

本学 2年生4名・3年生8名・4年生4名、教員4名

方法: 1. 大学で模擬授業を体験

手をあらいましょう！

1. どんな時に手をあらっていますか？



花王（株）とオシロイマの字あらいの時間印刷部

2. 手をあらわないとどうなるの？



バイキン（細菌）は
20分で2倍に、
40分で4倍にふえます

日本看護協会看護教育用プレゼンテーション資料

手につけるバイキン（細菌）が口から体の中に入ると、
お腹がいたくなったり、熱が出たりするかも...！

高齢者体験

1. 実際にゴーグルや重りをつけて体験してみよう！！



どんなふうに見えるかな？

ゴーグルをつけてみると...

重りをつけてみると...

《方法》

- 1) 折り紙やポスターを見てみよう！
- 2) 歩いたり階段を上り下りしてみよう！
- 3) 体験してみてどうだったかな？

※メモに書きこもう！

ダンボールトイレを作って見よう



実施した活動内容

つるぎ町立半田病院 病院内見学と看護師の仕事見学 ①内視鏡室の様子



③看護部長さんのお話を熱心に聞きました

②電気メスを使ってみよう



④看護師さんたちと集合写真を撮りました



学生のリポート

キッズナース事業への協力を振り返って、「参加動機」「参加によって得たもの」について調査した。その結果、「達成感」「伝える力の獲得」「社会性の向上」「対象者理解」「自己効力感」「人間関係への気付き」「子どもへの接し方の変容」「看護学生としての学び」「子どもとの触れ合いで得られた喜び」の9因子が抽出できた。

参加者のリポート

キッズナース事業に参加した子ども達を対象として、その動機・楽しかったか・看護師に興味を持ったかについてアンケート調査を行った。その結果、96%が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答し、72%が看護師になりたいと回答した。また、「看護師への興味」と「地域志向の程度」に有意な差があり、「人の役に立ちたい」「人と関わる仕事がしたいと回答した。

キッズナース事業に参加した子どもの保護者を対象として、「お子さんの参加のきっかけ」や「住んでいる地域における次世代の医療を担う人材育成に関して思うこと」等について調査した。参加のきっかけは「子どもが医療職に興味があった」「看護の仕事に興味を持ってもらいたい」などであった。また、「子どもに地域で就職してほしいか」に対しては「どちらでもない」が最も多く、理由は「地域に限られた職業しかない」「地域にこだわらない」であった。

事業への期待としては「看護の仕事のイメージをポジティブにしたい」「教育機関の充実」「地域の高齢化や人口減少に伴う人材不足への不安」等があった。

活動成果

- ・本学看護学生が既習の看護学を小学生に伝えることで、看護職者になることについてモチベーションが向上し、学びの内容が具体的に抽出できた。
- ・参加した保護者の思いとしては「看護師に興味を持ってほしい」という思いと、「地域には十分な環境が不足しているので、就職場所はこだわらない」という思いがあることがわかった。同時に、大学に対する期待も具体的に語ってくださったので、今後の課題が明確になった。

課題及び今後の展望

- ・キッズナース事業活動に参加した子ども達、協力した看護学生及び連携していただいた半田病院の看護師及び勝浦町担当者が捉えている「地域における次世代の医療を担う人材育成に関して思うこと」等について調査したが、その成果を研究として分析し、公表していく必要がある。
- ・学生の学びを学習の一貫として位置づける方法を検討していく必要がある。

活動テーマ

徳島の食文化に関する研究
— 一次世代に伝え継ぐ徳島の家庭料理 —

活動の概要

徳島県の郷土料理・家庭料理について聞き取り調査を実施、後世に伝え継ぐための基礎資料を作成する。また、地域の食材を使った料理を創作し、伝統料理の継承と地産地消の推進につなげる。

代表者名 : 高橋 啓子 (生活科学部, 管理栄養士養成課程, 教授)

活動メンバー : 管理栄養士養成課程

連携先名 : 那賀町 ヘルスメイトの皆様、川内町JA、吉野川高校

実施場所 : 那賀町、川内町、吉野川市

活動期間／スケジュール

平成 27年 5月 ～ 28年 1月 事前調査・打合せ

平成 27年 5月27日 吉野川高校との交流による地元食材を使った料理創作

平成 28年 1月28日 那賀町における郷土料理の実習及び聞き取り

平成 28年 2月4日 川内町JAカリフラワー料理の創作実習

実施した活動内容

1. 吉野川高校との連携による地元食材を使った料理開発

吉野川高校食ビジネス科の生徒さんと一緒に吉野川高校で生産されている食材を使った料理の創作を行った。これらの料理は吉野川高校のスクールカフェにて販売され、地域の人との交流を深めることができた。

2. 那賀町地域の郷土料理・家庭料理に関する調査

那賀町保健センター及び那賀町地区のヘルスメイトの皆様のご協力により、那賀町地域で作られている家庭料理や郷土料理の実習を行い、これらの料理の作り方や食した生活背景などについて聞き取り調査を実施した。

3. カリフラワー料理の創作

川内町JAの協力により、カリフラワーを使った料理を創作した。

また、カリフラワーの認知についてアンケート調査を実施した(別紙)。

上記2. 3の内容は冊子にまとめる。

学生のリポート

那賀町の郷土料理・家庭料理の実習に参加して：鹿肉の唐揚げはにおいもなく気にならずおいしかった。半ごろしはもちもちした食感でヨモギの風味がしておいしかった。また自分で作ってみたい。かきまぜはゆずがさっぱりしておいしかった。

いとこ煮は初めて食べたけどおいしかった。くさぎ菜は少し癖があったが、ジャガイモと合っていておいしい。さんまの姿寿司は、焼いた方が食べやすかった。

鹿肉やなますに鯖缶が入っていたり、寿司酢にゆずが使われており、普段食べないものが多く驚いた。地域によって同じ料理でも呼び名が異なることに驚いた。

いろいろと教えてもらえて楽しかった。地域の人々の生の声を聞きながらの実習はとても楽しく、知識も増えた。

カリフラワー創作料理から：カリフラワーは70%以上がこれまで数回しか食しておらず、今回の実習で初めて食べた学生も12%いたことに驚いた。料理はサラダだけでなく汁物や揚げ物など34種類の料理を考え、楽しく実習ができた。

学外協力者リポート

1. 吉野川高校との連携による地元食材を使った料理開発

高校で生産される食材を使った料理を創作して、学生の専門的な技術や知識を取り入れた工夫に生徒の勉強になった。提供した料理は地域の人に大変喜ばれた。

2. 那賀町地域の郷土料理・家庭料理に関する調査

学生との交流ができ、ヘルスメイトの人たちも活気にあふれていた。今後もこのような活動をしていただきたい。

3. カリフラワー料理の創作

若い人たちが想像もしていなかった料理をたくさんつくってくれて、感激した。試食もさせていただき、どれも大変おいしかった。若い人たちにもカリフラワーのおいしさを知ってもらい、消費拡大につなげたい。

活動成果

1. 吉野川高校との料理創作では、これまで学んだ栄養学や食品学、調理学など専門的知識を活かした総合的な活動ができた。

2. 郷土料理の調査では廃れつつある郷土料理や地域色豊かな家庭料理を調理学実習の授業に活用することにより、若い世代に継承していくことができる。

3. カリフラワー料理の創作では、学生の献立作成能力の向上にもつながる。さらに、これらの料理レシピ等の普及によりおいしく食べる方法を提供できる。

課題及び今後の展望

古くから伝えられてきた地域の郷土料理や家庭料理を再現可能なレシピを作成することにより、地域内での継承のための資料として活用できる。食生活の改善普及に使用できる。また、学生との交流により、地域の人々のやりがいが増える。今後郷土料理を普及させるためのイベント等に参加できるとよい。・川内町はカリフラワーの生産量が日本一であるにも関わらず、その販路の拡大に苦慮している。これらの料理レシピ等の普及によりおいしく食べる方法を提供できる。また、学生にとっては自分たちが考えた料理を公開するよい機会となる。

地元食材を使った料理の創作においては地産地消の推進につなげていきたい。

活動テーマ

寺院文化財調査研究スタッフ育成プログラムの開発

活動の概要

今まで詳細が不明であった四国霊場23番札所薬王寺と日和佐の街の歴史、四国霊場の歴史と文化を明らかにすることを目指すとともに、地域振興・観光文化に資する貴重な文化財の価値を適切に評価するための調査研究スタッフの人材育成及び育成プログラムの整備を目的とする。

代表者名：須藤茂樹（文学部 日本文学科 准教授）

活動メンバー：會田 実（文学部 日本文学科 教授）
平川恵美子（文学部 日本文学科 非常勤講師）
文学部日本文学科3年生・2年生・1年生・卒業生

連携先名：四国霊場23番札所 薬王寺

実施場所：四国霊場23番札所 薬王寺

活動期間／スケジュール

平成27年 9月 1日(火)・2日(水)	薬王寺第一回典籍調査実施
平成27年 9月25日(金)	薬王寺第二回典籍調査実施
平成28年 2月13日(土)	薬王寺第三回典籍調査並びに古文書調査実施
平成28年 2月25日(木)	法泉寺・童学寺・蓮光寺典籍調査実施
平成28年 3月23日(水)・24日(木)	薬王寺第四回・5回典籍調査並びに古文書調査実施

実施した活動内容

平成27年9月から平成28年3月にかけて、今まで詳細が不明であった薬王寺と日和佐の街の歴史、四国霊場の歴史と文化を明らかにすることを目指し、本年度調査対象である薬王寺、法泉寺・童学寺・蓮光寺の典籍調査を実施した。

薬王寺現地調査では、未調査のまま所蔵されていた典籍類を1点ずつ確認し、典籍に記載されている内容を把握した。典籍調査を基に文献調査カードを作成した。あわせて古文書調査を実施し、古文書の選別と写真撮影と採寸を行った。これらの記録は次年度以降に行われる調査の資料として利用する。

また、平成28年2月25日(木)には、薬王寺所蔵典籍類と同様の典籍類を所蔵している県内寺院の調査を行い、法泉寺(鳴門市)・童学寺・蓮光寺(石井町)に所蔵されていた未調査の典籍の確認作業を行った。

学生のレポート

野本竜生：日本文学科3年 くずし字に興味があり、参加しました。くずし字の魅力を知るとともにむずかしさを痛感しました。

曾我部遥：日本文学科3年 古文書の原物に触れることができ、貴重な体験ができました。卒業論文は、原資料を読み込んで書ければと思います。



活動成果

今年度の活動は、本格調査を行う準備段階である基礎調査になる。

計5回に渡る典籍調査により、未調査であった典籍類を11点ずつ確認し、文献調査カード作成を行った。

また、計2回の古文書調査も実施し、写真撮影と採寸を行った。

今回実施した薬王寺所蔵典籍類確認作業に関連して、徳島県内関係寺院の調査を実施し、それぞれの寺院に未調査の典籍が多数所蔵されていることを確認した。

調査研究スタッフとして博物館学芸員資格取得を希望する学生が参加することにより、地元の宝を発見する能力、問題解決能力が育成された。

また、実際の資料を基に調査研究を行うことによって博物館学芸員として必要な能力の育成に有用な活動であると考えている。

課題及び今後の展望

学生がさらなる史料解読技術、史料整理能力を身に着けること、コミュニケーション能力の向上、問題解決能力の習得を目指す。

今回調査した典籍類は未公開資料の調査であるため、今後の四国霊場研究に資すること多大である。

また、今回の調査は文化財研究における全体的な取り組みの一部である。文化財調査は想定している5年または4年後にし、資料目録及び報告書の刊行と、現地サテライトオフィスでの報告会を視野に入れている。

今後も何らかの形で調査研究が継続されることを強く望む。

平成26年度並びに今年度の基礎調査を基に、平成28年度はさらなる本格調査を実施する予定である。